

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（七）

フィリップ・ブオナローティ 著

田 中 正 人 訳

目 次

凡 例	
序 言	
第一章 革命の諸局面——テルミドールまで	以上、一六九号
第二章 平等派——パンテオン・クラブの創設と解散（その1）	以上、一七〇号
第三章 平等派——パンテオン・クラブの創設と解散（その2）	以上、一七一号
第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その1）	以上、一七二号
第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その2）	以上、一七三号
第三章 秘密総裁府——設置とその組織（その3）	以上、一七四号
第四章 蜂起に向けて——警察隊の叛乱、そして山岳派との提携	以上、一七五号
第五章 蜂起直前——情勢判断と戦術会議	以上、一七六号
第六章 平等者の共和国——財産の共同体の運営と防衛（その1）	以上、一七七号
第六章 平等者の共和国——財産の共同体の運営と防衛（その2）	以上、一七八号

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（七）

第七章 全市民の共和主義的紐帯と統治機構

第八章 教育——新しい習俗の涵養

以上、本号

第九章 蜂起直後に取るべき施策、そして挫折

以下続載

終章 ヴァンドーム高等法廷

補足資料

.....*

第六章 平等者の共和国——財産共同体の運営と防衛（その2）

配分になじまない労働

われわれは、社会の維持に不可欠の労働がさまざまな範疇の労働者に割りふられるべきことを述べてきた（本章「農業および必要不可欠な工芸」の項以下（前号）を参照）。しかし、そうした労働以外にも、自由を維持するためにすべての市民に対して平等に要請すべき労働が存在する。共和国の行政と防衛とを目的とする労働である。

公務の運営と祖国の防衛とは万人に共同のものである

蜂起委員会の考えでは、すべての市民がさまざまな法律の形成に参加する限りにおいてのみ、また、公行政を担当することができ、領土と法律とを防衛するために常に武装態勢が整っている限りにおいてのみ、社会の中で平等および自由が実現されるのであった。

統治術にのみ詳しい人びとの範疇がもたらす危険

もっぱら社会技術、法律および行政の諸原則に通じた人びとの範疇 *circle* が国家の中で形成されたならば、やがてその範疇は、自らの知性の優越性を、またとりわけ同胞市民たちの無知を、さまざまな差別および特権を作り出すための秘訣と見做すであろう。自らが遂行している公的業務の重要性を誇張することによって、その範疇は容易に自らを祖国にとって必要な庇護者と思わせることに成功するであろう。また、自らの厚かましい企てを公共の利益という口実で取り繕いつつ、合法的で自発的なものに見えるだけにいつそう耐えがたい隷属状態にすでに置かれている、先見の明のあまりない同胞市民たちに対して、なおも自由や平等のことを口にするであろう。

あらゆる市民にとって立法権行使が可能に

国家というものには、最初にいくつかの法律がありさえあれば十分なのではない。それらはすべてに備えることも、あらゆる時代に適應することもできないのであって、諸制度の精神を維持し、不測の事態に対応するためには、しばしば新たな法律が必要となるからである。

その上、自ら作り上げたものを経験によって改善するのは人間の本質なのであり、また、社会の目的が完全に達成されるためには、法律は引き続いて経験の結果を公行政に適用する必要がある。

国家には常設の立法権が必要であるとすれば、また、すぐ後で述べるように、この権力が全人民のうちにのみ存するとすれば、共和国を創設する人びとの果たすべき重要な義務のひとつは、すべての市民に立法権を行使しうるようにすること、換言すれば、人民に対して実質的に主権者である可能性を与えることである。一般的な主題に関して人民が賢明な決定を下す場合には、そうした決定は社会の平等にも幸福にも反することはありえないであろう。しかし、それらの決定が賢明なものとなるのは、平等がその言葉の十全の意味において存在する限りにおいてのみである。

この基本的な義務から、あらゆる市民にとって三種類の仕事が生じてくるのであり、それらの仕事は目的の重要性によって、それらに必要な注意によって、また、精神に与える高揚感によって、人生の大部分を魅力あるものとするであろう。それらの仕事は、社会制度および法律の諸原則を保持し、普及させること、それらを体験し身につけさせること、そしてそれらを実施すること、からなっている。

徳育および公教育を担当する行政官について、また青少年制度については別のところ（第八章）で述べることにして、ここでは、全員が通過すべき共同の教育舎 *maison d'éducation* を出た後に若者たちがどのような経過をたどることになっていたかを述べるにとどめておこう。

選挙権をもつにあたって要求される年齢と資格

あらゆる社会的権利の中で、法の形成に関わる権利ほど重要なものはない。法律によって、社会は生きもすれば、死にもするからである。その次に重要なのは、主権者の意思を執行することを担当する行政官の職務である。教育を受け、経験豊かで、慎重な人びとによってのみ、これらの権利は有効に行使されるのであり、またこれらの職務も厳密に遂行されうる。それゆえ蜂起委員会の計画では、立法機関は、その年齢以前には誰ひとりとして主権（の行使）にも行政官職にも関与しない年齢を示すこととなっていた。その資格があるという証拠を示さない者に対しては誰であれ市民権の行使を禁止することが問題とさえなった。しかし、そのことによって主権会 *assemblées souveraines*（次章参照）からあまりにも多数の市民を排除する口実を与えはしないかという心配があった。それゆえ、いったん実質的平等が確立された暁には利害関係の多様性や対立がなくなり、また、公務の管理運営術がきわめて単純なものとなることから、その管理運営術はやがてすべての人に理解しうるものとなる、との確信が委員会にはあっただけに、委員会はその方向には否定的な立場に傾いていた。

教育舎を出た後に、若きフランス人は民会に軽々しく参加させられることとなっていたわけではない。すなわち、議論の形式と順序とを理解させ、厳肅さと節度とに慣れさせるために、しばらくの間は彼らを発言させることなく、席を指定した上で民会に出席させるつもりであった。また、社会における人間のもっとも貴重な権利を手に入れるようになる前に、誰もが自由に自分の意見を表明できる集会に若者たちが通うのが望ましいとされていた。彼らはそこにおいて、法律学にきわめて精通した人びとに耳を傾け、共和国が彼らの眼前に提供する書物を精読するものとされた。

その上彼らは、兵営生活と軍事訓練とを一定期間体験した後にはじめて、投票権を行使しうるようになることとされていた。青年たちは、将来における彼らの使命をけっして見失うことなく、祖国のもたらすさまざまな恩恵とさまざまな法律、彼らの義務について絶えず語りかける祖国から常に見守られるのであった。

市民権は同意によって得られる

ある国でたまたま生まれた人間すべてを、市民の側で何らの議論を行なうことのないまま市民として扱い、また、こうして彼ら市民の生活全体に大きな影響を及ぼすにちがいない同意を推定する慣例について、委員会はこうした慣例を大いなる悪習と見做していた。ある市民が、彼が一員となっている社会の法律に服従するのは、明白に表明された分別ある自由な意思の結果でなければならない、と委員会は考えていたのである。

その目的のために、委員会は社会と市民との間での、また市民と祖国との間での相互的な誓いが明白に交わされるに際しての正規の手続きを設けることを考えていた。

規定の年齢を有している青年は、法に定められた段階の市民教育および軍事訓練を終えた後に、自分たちを登録簿に登録してもらうことを求めて、指定された日に市民の集会 *assemblée* にやってくることとされていた。この集会での議論の後に、社会契約 *pacte* の性質について、その契約が与える諸権利について、またそれが志願者たちに課すさまざまな

まな義務について説明がなされ、「その後」志願者たちは、彼らが聞いたばかりの、また彼らに対する教育を通じて学んだ条件でフランス社会の一員となることに同意するかどうかを表明するよう要求されることとなっていた。それを拒む者たちは、共和国から永遠に追放され、一定期間について生活に必要なものを持たされた上で、国境に送られることとされていた。

それ以外の人びとについては、彼らと主権者との間で正式の契約が結ばれ、それに続いて彼らは、新しい身分を示すさまざまな標章を受け取る。行政官から市民としての服装を着せられた彼らは、フランス市民として迎え入れられ、彼らの名前は人民の間を盛大に持ち運ばれる市民簿 *registre civique* に記載されることとなるのであった。次いで、新市民一人ひとりに軍服と装備一式が渡される。その装備には、紛失した際の不名誉を恐れて、戦闘においてより勇敢となるように、また、祖国が彼に託した事柄を命にかけて防衛せざるをえなくするように、彼の名前が刻み込まれることとなっていた。

主権を行使するための人民集会

市民簿に登録されてから死にいたるまで、市民は人民が主権を行使すべきさまざまな集会（主権会など）に招集され続けることとなっていた。蜂起委員会が自らの成功による最終的結果となるはずの権力機関の形態に関して抱いていた理論について私が行うつもりでいる詳しい説明（次章を参照）によって、読者にはこうした集会が以下のことを目的として開催されることがお分かりいただけるであろう。すなわちそれらの集会は、

受任者（中央立法院議員（次章「中央立法院」の項を参照）たちによって提案された法律について議論し、それらを承認あるいは拒否するために、

一定数の市民あるいは主権を構成する他のセクション *sections* によって要求された法律について討議するために、

全人民によって承認された法律について知り、またそれらを公布するために、開催されるのである。

統治機関の形成と活動

同じ説明（次章を参照）から、行政官 *Magistrats* たちの選任、彼らの任命、そして彼らの職務の遂行がもたらすこととなるさまざまな仕事、以上のことがどういふものかお分かりいただけるであろう。

重要な点は、これらの仕事を快適で人気のあるものとするのであった。われわれ改革者は、平等社会のおかげでフランス人が解き放たれた果てしない災禍についての記憶を、教育を通じて注意深く持続させることによって、また、法律や習俗や世論が公務の処理に献身的に当たる人びとをついに包むこととなる尊敬と感謝の念によって、そうすることができると考えていた。

公開集会は疲れを癒し、競争心を燃やす機会である

市民たちは、これらの集会の場所を芸術や荘厳さや秩序や自由が提供するきわめて魅力的なものすべてで飾ることに愛着を覚えるであろう。さらに、さまざまな利害対立ゆえにしばしばこれらの集会は騒々しい集会と化す混乱に陥っているが、そうした混乱が排除されることを考えるならば、その上、政治体制がきわめて単純なものとなるがゆえに、万人がこれらの集会の有用性を容易に理解しうることを考えるならば、彼らは、いったん真の平等社会が設立されたときには、それらの集会が必然的に関心や気晴らしや有益な競争心の対象となる、という確信を抱き続けることとなるろう。

市民はすべて兵士である

諸外国による侵略は常に生じうることであって、そうした侵略から祖国を防衛することは、法律の英知の本質的部分

をなす。どれほど見事な国内制度をもつてしても、戦争に不慣れた人民を不正かつ好戦的な隣国による侵略から守ることはできそうにないからである。

しかし一面においては、武器は共和国にとって有益ではあるが、他面では、武器がいつも一部の市民にのみ委ねられる結果、これらの市民が戦利品の誘惑あるいは見せかけの栄光に魅せられて、武器を他者の自由に対して向け、野望や専制支配を助長するときには、武器はきわめて有害なものとなる。これほど危険な濫用を避けるには、全市民に武器を与え、彼ら全員が武器を使うようにすることが得策である。共和国はこのような制度のうちに、今われわれが述べたばかりの危険を予防する手段を見て取るだけでなく、隣国からいっそう尊敬されるという利点を、また、市民を法への服従を習慣づけ、辛い仕事によって、また苦悩と死をものともしないことによって市民の力強さを増すという、やはり貴重な利点をも見て取ることとなるであろう。

祖国と真の栄光とへの愛の中で育まれる子供たち

それゆえ、それなりの体力を子供たちが身につけるとすぐに、彼らを軍事訓練に慣れさせることとなっていた。初等教育について語る際〔第八章を参照〕に、どのようにして子供たちに精神的な強さと勇気とを植えつけようと望んでいたかを述べることで、私はここでは、蜂起委員会のメンバーたちの考えでは、さまざまな制度の効果は、これ〔全市民武装〕との関連では、すでに兵營の規律と窮乏とに耐える覚悟ができており、祖国への愛に燃え、また祖国に熱烈に奉仕しようとしている若者のみを社会生活に導き入れることにあった、という点を指摘するにとどめておく。

青年は恒常的に国境で野営

新たな制度が国民の防衛力を増大させればさるほど、それらの制度はますます、諸外国に対する正義感と征服への

嫌悪感とを国民に抱かせることとなるであろう。通貨をもたず、贅沢もなく、市民以外の兵士をもたず、また、平等、自由、そして豊穡のもたらす幸せを享受する農耕人民には、隣国を抑圧するために武器を取ったり、あるいは自己防衛のために戦争に巻き込まれたときにも、延々と戦争を続けたりする意図も能力もない。

しかしながら、「この人民が」国際公法を遵守しても、隣国の不穏な動きや征服者による攻撃から守られることにはならないがゆえに、警戒態勢をとっていなければならない。健全な市民すべてで構成されるその軍隊が侵略者たちの厚かましさをすぐに懲らしめることとなるが、しかし、侵略者を国境で食い止め、侵略による災禍から国を守り、国民に急いで武器を取る時間を与える方がより賢明なのではないであろうか。それゆえ委員会は、当時のヨーロッパが置かれていた状態では、また、理性と自由とが新たな進展を見せるまでは、常にフランスの青年を共和国の国境に野営ないし宿営させておくことが必要である、と考えていた。

軍事教育の問題に取り掛かる〔第八章を参照〕前に、国民軍 *armée nationale* の形成、その兵力、そしてその移動について一瞥しておくのが賢明である。

すでに述べたように、その軍隊は兵士となりうるフランス人すべてで構成されるはずであった。法律によって、こうした能力が始まり、また終わると推定される年齢が決定されることとなっていた。

軍隊社会

等しい兵力からなる部隊に割りふられたすべての市民は、危機に瀕した祖国の呼びかけに応じて進軍する覚悟ができている。軍隊生活においてはもっぱら服従にのみ充てられる一時期が存在する。また上官は、一定の期間について人民によって選任される。蜂起委員会の幾人かのメンバーは、文民行政官を軍隊の上級職に就かせることが有益であると考えていた。こうした見解に関しては、統治機構 *gouvernement* について述べる〔次章「文民職と武官職との結合」の

項を参照) 際にたち返ることとする。

軍隊社会に由来する仕事

平時においては、軍隊制度は、市民に辛い仕事と戦時の軍事行動とへの準備をさせ、男たちの身体と精神とを強め、人民に対して娯楽と切磋琢磨のための幅広い場を設けることを目的とするものとされる。

以下のことのために、集会が頻繁に組織される。すなわち、新しい「祖国」防衛者の登録のため、

上官を選出し、公表するため、

軍隊式隊形移動 *evolutions* を行なうため、

競走や馬術や水泳などの教練を参観するため、

大規模な野営を行なうため、

熱意や勇氣に対して与えられる褒美および栄誉を授与するため、である。

全人民の動員は容易に実行可能である

ここまでは「平時においては」、軍事に関連するさまざまな職務は、不可欠な仕事が人間の生活に残す暇な時間の一部を快適に埋めてくれるのであり、それらの職務が不可欠な仕事の割りふりを乱すことも、調和を乱すこともない。しかし、戦争が起きると、軍事に関する職務は社会の維持にとって必要不可欠な仕事となるのであり、そうした職務の必要性は著しく増大する。

共同の防衛のために市民を召集し、全員の協力が必要とされない場合には、法律によって定められた規則に基づいて、

軍務に就くべき人びとを指定するのは、最高行政を担当する権力機関の役目である。

名簿、武器、被服、そして軍事訓練が共和国のあらゆる地点で常に良好な状態にあることから、全人民を動員するに際しても、連隊の行軍と同様に問題は生じない。これほどに恐るべき兵力を敵国に対置しうる国民はどこにあるであろうか。

しかしながら、人民が全体として、あるいは部分的に武器を取り、故郷から離れるとなると、生産的労働が中断されたり、減少したりするのであり、それゆえ社会の平常の状況の中で思慮深い行政が不測の災害に対する予防策を講じておかない限り、普段消費されている品物が不足することとなるであろう。

不測の災害と備え

こうした「不測の」出来事は、戦争による災禍と労働の中断とに限られるわけではない。人間が用心しても予見も予防もできない災害が存在する。洪水、旱魃、雹、そして人間の手で肥沃となった土地が度重なる大混乱によって蒙る不毛性がそうである。有効な社会制度がなければ、繁栄している地方もたいてい、このような出来事によって住民が減少してしまう。また、誠実な人間すべてにとってはるかに悲しむべきことは、勤労階級を貧窮で死なせることであり、しかもそれは、実際に食糧が不足しているからではなくて、金持ちたちが豊かな年に自分たちだけが蓄えうる食料品の価格をつり上げるために、そうしたときにあまり求人需要のない労働者には食料品価格の高さに手が出ないからである。

衡平に基づいた制度をもつ人民にあっては、財産と災禍は全構成員の間で平等に配分されるはずである。そこでは、必需品の少なさは、それが生じたときには、どこでも平等に感じられるはずなのである。しかし、欠乏状態にたち至る前に、土壌の通常の豊かさと住民の活動とによって実行しうるあらゆる予防手段を尽くしておかなければならない。

健全な市民すべてが労働すれば、社会の需要をはるかに上回る生産がもたらされるであろう。今社会を支配している

体制の下では、多くの無為者がおり、また、余剰物に変わってしまう大量の有用な品物があるからである。したがって不測の災害を防止するには、今日では豊年の過剰生産物は、自尊心や虚栄心や墮落した趣味を助長することによってわれわれを不愉快かつ不幸にするくだらない用途にほぼ完全に浪費されているが、それらの過剰生産物を集め、保存しさえすればよい。

現在の供給をいたるところで確保するために、また将来の不測の需要に備えるためにも、最高行政機関は生産と需要の量を容易に知りうることに基づいて必要な措置を引き出す。

今日、人口調査の正確さほど減多に見られないものはない。誰もが、より多く蓄えれば蓄えるほど、それだけ逆境から身を守りうると思うがゆえに、虚偽の届出によって公的税負担から自分の財を守ろうと努めるからである。しかし、ただ祖国のみがもつ単一の所有権が個人的所有権にとって代わる場合には、共和国が豊かであり、共同の労働の果実を衡平に管理し、配分しうる限りにおいてしか、誰も安心しえないのであって、今日では人びとに自分のことしか考えないように仕向けているのと同じ不安ゆえに、彼らに対して、仲良くなり、一体となり、助け合い、またごまかしを行なうことなく自分たちの需要と資源とを分かち合うよう促される。蜂起委員会は次のように述べていた。すなわち、あらゆる事態を熟慮してみれば、社会状態のもたらす恩恵はほぼすべて個人的所有の導入によって消えてなくなること、また、個人的所有が消滅するときにはじめて、誰もが自分と共通の協同社会の構成員 *members of the community* の安楽とどれほど密接な関係があるかを感じるようになる、ということが分かるであろう、と。

行政技術 *science d'administration* は相反する多くの利害の衝突ゆえにきわめて厄介なものとなっているが、財産の共同体によってその技術はわが国のいかに無能な商人にも可能な計算となってしまう。

まさに豊穡の時期にいっぱい満たされる大貯蔵庫によって、共和国は不測の災害に備えることとなっていた。外部からのほんの些細な危険に対しても、武装した人民に必要な食糧がそこから取り出され、武装した人民の結集場所に運

搬されることとなっていた。

〔これに対して〕現在の体制の下では、戦争に備えようとするに際しての最大の障害は、武装兵士たちの移動にあるのではなく、彼らを結集させ、維持することにある。

軟弱さやエゴイズムがもたらすさまざまな抵抗がある程度まで克服しうるとしても、いやいやながらやっと支払う金を徴収するために、また、急騰や従業員による不可避的な略奪によってきわめて高くつく直接買い付けによってあれ、あるいは何をもってしても満たしえない、飽くことをしらず、また抜け目のない貪欲さをもつ企業家を使ってあれ、あらゆる種類の食糧を確保するために、なすべきことは依然として多く残されているからである。

時として、少なくともしばらくの間は外国への隷属への恐怖が祖国への愛をかき立てることによって、臨時の税徴収に有利に作用することはある。しかし農業および製造業に致命的な打撃をもたらし、多くの不満者を作り出すことによってしか、外国による侵略を撃退するための手段を手にしていないのである。

軍隊の維持

わが陰謀家たちが構想した政治体制の下では、これらの障害はすべて消えてなくなる。すなわち、備蓄はすっかり整っており、また、市民たちから日常の生活費のごくわずかな部分を取り上げる必要もなく、武装部隊 *corps arme* はいつかになるときに国境に向けて進軍することができる。市民の数は同じなのであって、どこで消費が行なわれようと消費量は増大しないからである。

臨時の資源

しかしながら、繰り返し戦争を行なわなければならない場合には、一部の市民が生産的でない仕事に従事するのに、

他方で必要な労働の総量と消費者の数とは減少しないことから、ついには災いと混乱の原因となりかねない、備蓄の不足が生じることとなる。

そのときには、平等原理の新たな適用が新しい資源を提供してくれる。従軍している兵士は、何も付け加えないほどの重荷を負っているのであって、共同の責務の新たな再配分を通じて、出陣していない人びとの労働を増加させることが公正さにならっている。一日あたり半時間ないし一時間の追加労働が、もつとも不幸な戦争が人民に負わせる最大限の負担となるであろう。時おり陰謀家たちは叫んでいた。「より単純であって、より簡単に実施しうる手段によってこれほど大きな効果をもたらされる社会体制があるのなら、それをわれわれに示していただきたい」と。

戦争の濫用に対する予防策

このような制度をもつ人民がその兵力を容易に展開できるからと言って、その人民は常に隣国を不安に陥れようと思っている、と結論付けることは誤りであろう。その反対なのであって、急いで宣戦布告をしたり、不当な宣戦布告を行ったりすることを予防するためであれ、交戦中の軍人の行動を統御するためであれ、その人民は自らにルールを課す、と考えられるのである。

おそらくそのような人民は、侵略を撃退するためにしか、あるいは不当に抑圧を受けている隣国を支援するためにしか、戦争を行なわないであろう。なぜ、豊穡な土地の資源に満足し、貧者もベテン師も抱えていない人民が、どう用いるかもわからない生産物を奪い合うために隣国に出かける気になりうるのであろうか。農業中心で質素で幸福で、また自分たちの習俗と法律に忠実である人民にとっては、略奪を好む心は征服への情熱と同じくらい無縁のものであろうし、また、彼らの貿易制度が彼らの経験することのない種類の人びとである商人の争いを支持する危険を彼らに冒させるようなことはけっしてないであろう。

蜂起委員会では、法はあらゆる攻撃戦争を禁じるべきであり、また、軍隊に対して敵の攻撃を共和国の領土で待ち受ける義務を課すべきである、と考えられていた。また、勝者が手に入れる戦利品が結果的に随伴する腐敗から国民を守るために、個人的戦利品はいっさい禁止されること、また、兵士はすべて、たまたま手にしえたものすべてを公の保管所に持参する義務を負うこと、これらのことを蜂起委員会は望んでいた。

しかしながら、軍隊における放埒さを防ぐ最良の保証は、隷属状態にある諸国民の財産に対する輕蔑から生じるのであり、そうした輕蔑は共同の教育 *education commune* がすべての人の心に刻み込むこととなる、ということがよく分かつていた。市民たる兵士は、戦闘のさなかに野營しているときも、平等と祖国とへの愛以外の情熱も、また祖国の法以外の指針ももつことはなかったであろう。

国際公法の尊重

陰謀家たちは、人類愛を共和政への愛に付け加えていたのであって、彼らの計画はすべて、結局は人類の幸福と関連をもっていた。彼らの願いが実現されたとしても、市民の間にみなぎったはずであるのと同じ平等および正義の精神が諸外国に対する共和国の行動を律するようになったかどうかは、彼らの及ぶところではなかったであろう。「ただし」彼らは、フランス人民が自らを人類の大社会の一員であると思ひつ、その英知と模範とによって世界平和を確実なものとするために、また自然がすべての人間に与えた諸権利をあらゆる場所で尊重させるために貢献することを願っていた。

行政と国家防衛とを目的とする仕事は、人びとの生理的欲求を満足させることに役立つ仕事に劣らず、重要なものである。それらの仕事があれば、国内秩序を維持することができず、外からの危険を防ぐこともできないからである。それらの仕事はさらに、すべての人にとっての義務でもある。そうでない場合には、やがてそれらは、もっぱら公共の

利益のみを目的とすることをやめてしまふからである。

私が「これから」語ろうとすることは、自由の維持と社会の幸福のためにやはり必要なものではあるが、命令されるものではなく、自由意志に基づくものであり、人気のあるものであるだけに、楽しみを源泉としているだけに、また、平等の感覚と平等への愛とを強固にするだけに、いっそう好ましい結果に富んでいる点で、これまでのものとは異なっている。

原注 (原注番号は、前号からの続きで示してある)

(7) 私の思い違いでなければ、軍隊内の階級の永続性は、公的自由にとつてもっとも大きな災いの種のひとつであり、まさにそのことによってある種の暴政 *tyrannie* がさまざまな法律の崩壊の上に樹立されるのである。かつては善良な市民であった将校たちも、ただの一兵卒よりも永遠に上位に位置していると知ると、少しずつ自分たちの利害と人民の利害とを切り離し、新たな欲求を作り出すのであり、彼らが祖国に対して行なう貢献から、勲章や富や権勢をほしきままにするための称号を獲得し、もはやある職業に従事しているようにしか武器を取らなくなり、そしてついには、上官にすべてを負っているがゆえにその上官に好かれようとして、絶対的な服従の教説を正しいものとして認め、部下たちには彼らの諸権利についての思い出までも圧殺しようとする貴族支配的 *aristocratique* な集団を国家の中に形成するのである。

戦争はもっぱらそれを職業としている人びとによってのみ有利に行なわれうと諸国の人民に納得させることは、専制支配の利益となる。しかし、それは経験によって否定された謬見である。自由な精神の持ち主は、戦術上のあらゆる原則よりも強力な原動力を内に秘めている。団結し、思慮深い制度を備えている人民は常に、それだけで自分たちの敵の厚かましさを打ち破るに十分であろうし、また、その軍事作戦を指揮するに足るだけの経験を積んだ老人や行政官を手に入れているであろう。

スバルタには終身の将校がいたであろうか。クセルクセス率いる無数の軍勢に立ち向かったギリシア軍の指導者には終身の上官がいたであろうか。古代ローマの全盛期には終身の司令官がいたであろうか。スイス人やオランダ人やアメリカ人が、

規律がとれ、隸屬狀態に慣れ、職業的將官に指揮された、抑圧者の部隊を撃退したのは、農民と羊飼いからなる軍隊によつてではなかつたであらうか。一握りの無教養なコルシカ人がジェノヴァ貴族の規律ある兵士たちと粘り強く戦つたのであり、また、長期にわたつて多数の教養あるフランス人の軍隊に抵抗した。最後に、フランスが、自由に向かつて大きく前進してゐた時期に、ヨーロッパの支配者すべての軍規の乱れた兵士たちを撃退し、打ち破つた際の驚くべき勇猛心は、未熟な兵士たちと新しい上官たちのおかげであつた。

〔*1〕「証拠書類 三」の訳注〔3〕をも参照。父タレイオスの果たしえなかつたギリシア遠征を試み、前四八〇年にテルモピレーの戦いでスパルタを破り、アテナイを占領。しかしサラミスの海戦で敗れて撤退。翌年にもギリシア遠征を行なうが失敗。

〔*2〕スイス人。一三一五年のモンガルテンの戦いで、また一三八六年のゼンバッハの戦いにおいて、スイス領内に侵入したハプスブルク軍をスイス農民軍が打ち破つたことを指すか。

〔*3〕オランダ人。スペインの支配下に置かれたネーデルランドが、スペインによる収奪やプロテスタント迫害に抗して一五六八年から八〇年間にわたつて、紆余曲折に満ちた独立戦争を展開。一五七二年には貧乏貴族や浮浪者からなる海賊集団による「海乞食のブリーレ占拠」もあつた。最終的に一六四八年のウェストファリア条約によってオランダ連邦共和国の独立が承認されることとなる。

〔*4〕アメリカ人。一七七五年四月、ボストン郊外でイギリス本国軍と植民地アメリカの農民兵が衝突し、独立戦争に展開。八三年の九月のパリ平和条約によってイギリスからの独立が承認された。

〔*5〕一七八四年からジェノヴァの支配下に置かれ、収奪を受けたコルシカ人は何度も叛乱を起こしたが、その最大のものは一七二九〜六九年のコルシカ独立戦争（四〇年戦争）であり、山岳民の叛乱に農民の叛乱も加わつた。五三年からは啓蒙思想を奉じる軍人バスカル・パオーリがナポリから戻り、五五年にジェノヴァをコルシカから放逐し、コルシカの独立を宣言した。これに対してジェノヴァは、六八年にコルシカの統治権をフランスに譲つたことから、今度はフランス軍との戦いが始まつた。六九年のポンテノウの闘いによってコルシカ軍は降伏し、パオーリもロンドンに亡命した。これを機にフランスはコルシカを併合。

〔8〕平和は自由に次ぐ重要な善なのであつて、武力に訴えることは、自由が脅威に曝された場合にのみ、有用であり、正当で

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（七）

ある。この場合を除けば、いかに好結果をもたらす戦争であっても、人類に対する侵害であり、また、戦勝国自体にとって災禍の源でもある。

歴史がわれわれに教えるところによれば、軍事的栄光は幾度となく専制支配への足がかりとなった。征服と略奪が市民を腐敗させ、敗者を絶望と復讐に向かわせ、世論のうちに騎士道的で野心的な誇りを導入し、また、規律に従わせるといふ口実のもとに兵士が慣れさせられた暴政を固々しくも祖国に及ぼす謀反の指導者たちを法律より上位に置くだけに、法律と習俗によって軍人氣質を抑えることがなおさらのこと必要である。こうした裏切り者たちは、軽はずみな戦友たちの間に巧みに彼らが醸成する金銭欲や榮譽欲を用いて、いたるところに腐敗をばらまき、美徳を放逐し、自分たちが隷属させた諸国民の救い主であると思ふにも自称するのであり、また、人類を冒瀆し、あらゆる宗教思想を馬鹿にした後に、自分たちの犯罪的な権力をぬけぬけと神および正義の庇護の下に置くことまでやってのけるのである。

〔*〕 英訳版の訳者ブロンテールは、「ある時期、自らのことを『サン・キュロット的市民』と署名していた篡奪者ボナパルトについてのなんと素晴らしい描写であることか」との訳者注を付している。Buonrotti's *History of Babeuf's Conspiracy for Equality* translated by Brontelle (O'Brien), London, 1836, p. 179, note.

なおブロンテールのフルネームはジェームズ・ブロンテール・オブライエン James Brontelle O'Brien。いささか遅くなれたが、略伝を以下に記しておく。一八〇五年、アイルランドのロングフォード生まれ。ダブリンのトリニティ・カレッジに学んだ後、ロンドンに出て弁護士を志望。ウィリアム・コベット William Cobbett らの普選運動にかかわり、三六年にはロンドン労働者協会に参加。ハザリントン Henry Hetherington の『ア・マンズ・ガーディアン』紙にブロンテールのペンネームで寄稿。後にこれをミドル・ネームとして用いるようになった。三六年にボナローティの『パプーフの陰謀』の翻訳を、三七年には『ロベスピエールの生涯』第一巻を刊行。三八年から始まった、労働者の地位改善のためのチャールティスト引導の中で指導的役割を果たした。四〇年から四一年にかけて暴動や陰謀を教唆したとして二度獄中に。出獄後、総選挙でトリー党との提携を推進するオコンナー Feargus O'Connor との間で対立が激化。四八年四月のチャールティスト全国大会の際に脱退。その後新聞発行や著作活動を行なうが、六四年十二月、貧困のうちに没。

訳注（訳注番号は、前号からの続きで示してある）

[5] 徳育 education と公教育 instruction publique。教育を指すフランス語としては、education、instruction、formation として enseignement がある。education は子供を対象に人格や性格形成を行なう徳育を、instruction は知育を、formation は技能を教える訓練を、そして enseignement は知識体系や科目を教える教育を指す、という使い分けが厳密には存在するものの、本書での前者二者の用いられ方は曖昧な箇所が多い。厳密に区別されて用いられる場合には、education を徳育と、instruction を知育と訳し分けたが、必ずしも明確でない場合には双方とも教育と訳しておいた。

[6] 民会 comices。前四〜五世紀のアテナイにおいては全市民参加の民会が開催されていたが、規模の大きなローマでは市民総員参加の民会 comitia は物理的に不可能であり、指導者層は衆愚政治への不信感を抱いてもいた。したがってそこでは民会の機能は低くなっており、権限も提案への賛否の意思表示だけであった。ただし高位政務官の選出は民会であり、政務官になることによってはじめて元老院議員にもなりえた。

[7] 市民簿 registre civique。教区 paroisse の住民について誕生、死亡、洗礼、結婚などの事跡を記した教会簿札 registre paroissial が念頭にあったと思われる。

第七章 全市民の共和主義的紐帯と統治機構

頻繁に開催される市民集会の利点

蜂起委員会は、共和国においては市民が自分たちのなさねばならないことを共同で行なうことを望んでいた。委員会の述べていたところによれば、清廉潔白な多数の市民の存在がエゴイズムの隠れた衝動を抑え、お互いに助け合う必要性をいっそうはつきりと感じさせ、また、各人の心に自分の義務を十分に果たしたことによって皆から称賛を得たいという欲求を抱かせるのであった。

これは気晴らしのためなのであるうか。共有される場合にのみ喜びを味わいたいと思うことは、平等の精神にきわめ

平等をめざす、いわゆるパプーフの陰謀（七）

て合致している。それゆえ、自由な人民は頻繁に集会をもつのであり、「他方」隷属状態にある人びとにはそうした集会はまったくない。ある国家の中の幸福は、公共の娯楽がより好まれるか、あるいは引きこもって大衆の苦悩と不安に対して無関心になることがより好まれるかに応じて、多くも少なくもなるのである。

思慮深い立法機関の采配を通じて、自然や人生や社会のさまざまな出来事が、いずれも教育と娯楽の機会となる。立法機関は、ある出来事によって、神の行ないについて、また社会体制の素晴らしさについて市民の注意を促し、また他の出来事によって偉大な人びとの美徳を称え、市民が彼らをお手本とするようにする。あるときには勇氣をかき立て、あるときには平等への愛を奮い立たせるのである。しかも、絶えず人びとの心を高尚な主題で満たすことによって、立法機関は、人びとの心を苛立たせ、退廃させる欲求やよこしまな情念から人びとの心を守るのである。

四つの範疇の集会

私の思い違いでなければ、蜂起委員会は、四つの範疇の人民集会 *assemblee du peuple* を区別していた。委員会は主権の行使、裁判、そして行政を目的とする集会を第一の範疇に属するものと見做していた。私はこれについてはすでに述べたことがあり〔第六章を参照〕、また、統治機関の形態について報告する際〔本章後半を参照〕に再度論じることとなる。第二の範疇に属する集会は、私が言及したことのある〔第六章を参照〕軍事体制に関わるものであった。第三の範疇には、もっぱら知育 *instruction* 用の集会が属していた。これについては、徳育 *education* と知的能力の発展とを論ずる際〔第八章〕に述べることとなる。最後に、第四の範疇の集会によって、委員会はフランス人の心のうちに美德への愛を抱かせ、その愛を強化するつもりでいた。委員会がこの〔第四の〕範疇についてどのような考えを抱いていたか、簡潔に描いておこう。

祭典

蜂起委員会はまず、市民生活のうちできわめて注目すべき出来事に眼差しを向け、それらすべてを人民祭典の主題とすることが、委員会の構想した諸制度の精神に適っている、と判断した。〔平時には〕兩性の結合〔結婚〕、新生児の紹介、教育舎への子供の入舎、国境に向けての青年の出発、彼らの機関、そして市民の一員としての彼らの受け入れ、これらがフランスのあらゆる地点で祝われる公的な祝祭の理由となりえたことであろう。

戦争が起きた場合には、戦士〔軍人〕の出征、彼らの帰還、戦闘中に亡くなった祖国防衛者に対して表すべき敬意、そしてきわめて勇敢な人びとに榮譽として授与すべき凱旋式、これらは魂を高揚させ、戦意を維持するのに適した、別種の祭典を行なう機会となったことであろう。

監察集会

委員会の計画では、別の集会が公的な称賛への願望と公的な非難への恐れとを抱かせることを目的としていた。決められた時期に、市民の行動、とりわけ行政官の行動に対して一種の監察 *censure* が行なわれるものとされていたのである。すでに述べたように〔第六章「市民権は同意によって得られる」の項を参照〕、若者が市民簿に登録されるには人民の承認が必要であるとされていたが、老人に授与すべき榮譽についても、また、死者に輝かしい名譽を付与するにあっても、同様であるとされていた。

委員会の考えによれば、討議を明解なものとすることによってであれ、習俗の保持に留意することによってであれ、あるいは最後に、青少年の教育を指導することによってであれ、老人たちは共和国の統治機構の中で重要な役割を演ずるものとされていた。公的集会での特別な服装と指定の席とによって識別される彼ら老人は、人民に対して行なわれるあらゆる提案に関する意見を、集団として率先して提出するものとされていたのであり、監察に関わる重要な職務と主

たる影響力とが彼らに割り当てられることとなっていた。そして、尊敬の念に満ちた、子としての敬意を払うことによって、非の打ちどころのない彼らの人生に報いつつ、より分別のない世代の軽率さや性急さから公的な討議を守ることとなっていたのである。

公務員に対する審判

わが陰謀家たちはまた、審判 judgement を制度化することも望んでいたものであり、職務を終えた行政官すべてがこの審判にかけられることとなっていた。つまり、以前の「職務の」処理が賞賛に値すると認められない限り、誰ひとりとして別の行政官職には就きえない、とされていたのである。

死者に対する審判

また、どれほど栄光に包まれた市民にも、望んだりあるいは恐れたりする何かが残えず残されているようにするため、委員会は、死者に埋葬の栄誉を与えたり、あるいは拒否したりする審判に死者の生きざまを付していた、古代エジプトの風習をフランスに移入することを考えついた。

自然と人の手 *manus* とで美しく飾られた場所が、立派な市民の亡骸を収容することに充てられるはずであった。きわめて立派な人びとのために人民が建立したモニュメントや万人の名前と美德を碑銘として刻むことは、教育と祖国愛のための限りなく広い場を後世の人びとに伝えたことであろうし、また、神聖な敷地内部の管理が任されることとなっていた老人たちは、自分たちの模範を通じて、全国民に対して有徳の士たちへの敬意を表する気にならせたことであろう。

記念すべき出来事の周年祭

さまざまな祭典が、平等を樹立し、強固にすることに大きく貢献した記念すべき出来事を祝うことに充てられようとしていた。それらの出来事を生じさせた原因、それらに付随した状況、そしてその帰結としての善あるいは悪を人民の眼前に突きつけることによって、国民の歴史の講義、そして道徳と政治の講義を人民に行なったことであろうし、また、思慮深さを欠いたならば共和国という船がぶつかって砕けかねない暗礁を人民が理解するようになったことであろう。

競技と見世物

陰謀家たちはまた、これらの出来事のうちの幾つかが実際に演じられることを望んでいたのであり、その際、立法機関は鼓吹しようとする感情を心のうちに深く刻み込むべく、詩や音楽や舞踊、そして絵画をいかようにも利用しえたことであろう。立法機関は世論〔の評価〕によって授けられる褒美を使って、勇氣、敏捷さ、節制、節度、仕事への熱意、そして、平等および自由を豊かにし、それらの支えとなる身体的・精神的資質を評価することとなっていた。

委員会にあっては、人民全体が共有しない娯楽は、委員会の言によれば、厳格な審判者による監視の目の及ばない妄想がやがて万人の幸福に大きく反するおぞましい悪癖をもたらすことへの恐れから、適切な制度をもつ国家からは排除されるべきである、と思われていた。

神性、そして靈魂の不滅性

これらの制度すべて、そしてそれらが生み出し、維持する共和主義的習俗は、すべての人の心の中に法律と教育が種を蒔くこととなっていた宗教観のうちに最後の重要な後ろ盾を見出したことであろう。フランス共和国は、いかなる天啓宗教〔神の啓示に基づく宗教。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教〕をも認めていなかったのであって、いかなる個

別の信仰も採用しないこととなっていた。しかしフランス共和国は、平等を、人民の盛大な祝祭によって明示される効用をもたらす神性 *divinité* の意に適う唯一の教理としたことであろうし、また、善良な市民の心の中に幸福な不滅性への希望を刻み込んだことであろう。

共和国のさまざまな部分を結びつける紐帯

蜂起委員会が樹立しようと望んでいた社会秩序の中で、委員会にとってもっとも困難であると思われるのは、共和国のすべての部分を強固に結びつける隠れた紐帯を維持すること、また、それらのひとつひとつが自らのことを別個で独立しており、他の部分の境遇にとってもよい一個の全体と見做すことなく、自らの繁栄が他の部分の繁栄に左右されており、共同の意志と行動とによってのみ繁栄を保ち、増進しようと感じるようにする隠れた紐帯を維持することであった。

多少とも広大であればどの国にも、豊かな余剰物を産出する土地をもつ豊かな場所と住民の需要にやっと足りるだけの土地をもつ場所とが存在する。共同体体制の下で双方の土地が結びつく場合の利益は著しい。しかし、自然に恵まれたコミュニティがそうではないコミュニティと結びつくことを煩わしいことと見做さないようにするには、また、平等社会の法を侵害しつつ、より快適な生活を手に入れ続けたいなどと願わないようにするには、どうすればよいのであろうか。

新しい人民の基礎を築こうとする者であればおそらく、こうした混乱の生じる可能性のうちに、その人民の領土を拡大あるいは縮小するための動機を見出すであろう。あるいは、各コミュニティがその他のコミュニティに期待する何かをもつように、生産物に変化を設けることによって、おそらくはそれに成功するであろう。しかし、主として恩恵の相互性によって、また社会体制の長所の認識によってこそ、問題となっている紐帯は断ちがたいものとなりうる。共和国南部の住民が、北部にとどまっている人びとがどれほど有用であるかということ、彼ら〔北部の人びと〕が彼に味わわ

てくれるさまざまな楽しみによって、彼らが防衛している国土の重要性によつて、また、習俗と法律の一致が生み出す友愛感情によつて認識するときには、彼は自分の魂が高まるのを感じ、幾百万人もの人びとが協力して彼を幸福にしよふとするための社会機構に感嘆するであらうし、また、彼にとつて大切なこの平等のためにも、平等は自分のコミュニケーションの境界を超えて共和国の全領域を含まなければならない、ということを受得するであらう。

市民の間での意思疎通

ある国家を構成するさまざまな部分の住民の間での頻繁な意思疎通〔communication 交通、往来〕ほど、こうした感情を生じさせ、持続させるのに適したものはない。そうした意思疎通は、万人が熱心に祖国に奉仕しようとしていることを住民に示して見せることによつて、彼らの熱意を強めるからである。今日商人たちは、われわれが自分の任務を果たし、学び、またいっそう立派な存在になるためになすべきことを、自分が金持ちになるために行なっている。しかし、個人的所有の放逐によつて彼らを突き動かしている情念が抑えられるのであり、それゆゑ、共和国を一都市の中に閉じ込めたいとは願わない立法機関は、そうした情念を悪意がなく、また良好な結果を豊かにもたらす動機に置き換へなければならぬ。食料品の運搬や命令の伝達や統治および戦争のための職務は、多数の市民に国内を往来させる。しかし以上ですべてではないのであつて、それら以外にも、単に精神や心の喜びへの好みだけから生じる意思疎通をも義務的な意思疎通に付け加へねばならない。しかも、頻繁に開催される多種多様な公的祭典による以上に、そうした意思疎通をうまく維持しえ、追い求めさせうるものはないであらう、と思われる。

祭典

どのコミュニケーションも、またどの県も、独自の祭典を執り行うこととなつてゐた。より全体的なその他の祭典は、共和国

政府「所在地」のすぐ近くでのみ催されるものとされていた。また最後に、次々に全国民の注目を集める榮譽に与ることとなるその他の祭典が、幾つかの地点を代わる代わる美しく飾ることとなっていた。

権力機関の必要性

まさにこのような制度によって自由を強固に確立すべきであり、また、徐々に習俗を変えることによって、フランス人は幸福で、団結し、愛され、尊敬され、また不屈のものとなるであろう、と蜂起委員会のメンバーは確信していた。しかしながら、改革者たちのさまざまな配慮も、彼らの営為を武力と腐敗から守るための、またその営為をよりよいものとするための手段を熟慮しておかなかったならば、不十分なものとなったことであろう。

諸制度がいかに思慮深いものであったとしても、それらの制度に対してエゴイズムの側からの努力よりも強力に働く保障を立法機関が与えておかなければ、やがてそれらの制度はそれらが樹立した平等ともども瓦解してしまうであろう。それゆえ、一般利益の規範から逸れる人びとをその規範に連れ戻す備えが常にできているただひとつの共同の力 *force* にすべての個人的な力を結び付けること以上に確実な保障はない。これが政治体の創出である。

立法権は人民に存する

しかし、この力が「主権者たる人民の」意思に従わなければ、この力はそれ自体危険かつ有害であり、またその意思が人民に直接に由来しない場合には、それは人民の幸福と自由とに反したものとなってしまふ。したがって、国民の意思の表明すなわち法は、人民の所産でなければならぬ。それゆえ、蜂起委員会はまさに人民に対して、人民の意思行爲によって平等の大原則を維持する務めを委ねることを要求していたのである。

最初のさまざまな制度がいかに思慮深く構想されたとしても、それらは社会の将来的な危険や必要のすべてを予測す

することもできないし、また、社会が陥りかねないあらゆる状況に備えることもできない。それゆえわれわれの共和国も、すべての政治体と同様に、引き続いて立法することを必要とし、したがってまた、先ほど見たように、人民のうちにしか存しえない常設の立法権を必要としたことであろう。

平等を維持しうる社会経済体制の基礎を提起した後に、蜂起委員会は、人民主権の原則がけつして侵害されることのないための備えをしておこうと考えた。言い換えれば、人民に対してはその同意がなければいかなる義務も課すことができないように、人民が容易にその意志を表明しうるように、また、人民が自分たちの討議の中で十分な分別をもつようにしようと考えたのである。

この目的を達成するためには、人民を形成する構成員、人民の意思の表明をもたらし、その意見を知るために従う形式、そして行政官をその意見に従わせるために取るべき予防策、これらの点を明確化する必要があった。

公権力に関する委員会の計画について、時間が経過したことから、また、私のかすかな記憶だけという手がかりから、私に可能な限りにおいて正確な報告をする前に、私はそれらのプランがすべて、「一七九三年憲法」によって認められ、またその憲法の特徴をなしている「人民は法律について決定する、*deliberer sur*」〔九三年憲法〕の「憲法」第一〇条」という基本的教理の確実な実施を目差していたことを予め知らせておかねばならない。それに私は、これらのプランを最終的に決定された論点として示すことなどまったく考えてはいない。

委員会が述べていたところでは、人民は同じ政治的法律の下で兄弟のように仲良く暮らす人びとの総体であり、また、自然は諸個人の幸福と社会の持続的な安寧とを諸権利の平等に依存させているがゆえに、不平等な配分を受ける者がただひとりでも国民の内部にいるようなことがあれば、やがて必ずや混乱と解体の種が生ずることになるのであった。したがって、知的能力が発達する年齢に達したときに、国土の中で生活すること、また、主権者たる人民のデクレに従うことに同意するすべての住人が市民であり、また立法権の構成員なのである。

外国人

私は、対外貿易に関する蜂起委員会の見解について論じた（第六章「対外貿易」の項を参照）際に、委員会はその運営を行政官に委ねるつもりであった、と述べておいた。委員会はその点に関して、財産共同体の原則に従って見解を表明しただけではなく、同じ手段によって、万人の諸権利と幸福とを保障する習俗の力と平等への愛とを弱らせかねない有害な手本の感化を退けることを意図していた。それゆえ、フランスと隣国との間には障害物の立ち並んだ障壁が築かれることとされていた。しかしながら、それらの障壁は通過不可能なものということではなかった。すなわち、逆境にある自由の友たち、フランスの諸制度を知りたいという欲求から引き寄せられる諸国民の恩人たち、純粹な心から平等と幸福とを求めにわれわれの共和国にやってくる、隷属状態にうんざりした人びと、以上の人びとに対しては、人類への愛からそれらの障壁は開かれることとなっていたのである。

外国の軽薄さや風習を導入する者すべてについては、何の容赦もなく厳しく追い払うこととされていた。好事家たちは厳密なチェックを受け、厳しい監視のもとに置かれることとなっていたのであり、また、誠実に市民権を手に入れようと望む者に関しては、市民権を彼らに与える国民証書 *acte national* に先立って長期にわたる綿密な修業期間を設けることが法によって求められることとなっていた。

広大な国土に分散しており、太人数からなる人民にあっては、国民の意思を一度に手に入れるために市民すべてをただひとつの集会に集めることは不可能である。それゆえ、人民全体が区分される諸セクションを一律的にかつ適切な形で調整し、また、人民全体のさまざまな要望が過小評価されたり、歪曲されたりする危険を冒すことなく、それらの要望を迅速かつ簡単に比較する方法を見つける必要性が生ずる。蜂起委員会は、こうした目的が以下の三つの機関によって達成されうる、と信じていた。すなわち、

一、*「区いんこひつ」* 主権 *assemblies de souveraineté*、

二、中央立法院 *assemblée centrale des législateurs*、

三、国民意思保持院 *corps des conservateurs de la volonté nationale*、の三機関である。

最初の二つは、「一七九三年憲法」によって認められたものである。第三の機関は、委員会が必要と判断した補足〔本章「一七九三年憲法への補足」の項を参照〕の対象となるはずであった。

主権会

主権会を形成するために、共和国は、集会の便宜上可能な範囲の広さをもつアロンデイスマン〔区〕に分割されることとなっていた。各区には、以下のものが置かれるものとされた。すなわち、

すべての市民で構成される主権会、

上記の集会によって選任される、老人で構成される元老会 *senat*、

同じく上記集会によって選ばれる議長 *président* と幹事 *secrétaire*、

人民の集会のための、装飾を施された便利な講堂、

文書館、

集会を招集し、集会における秩序維持を担当する吏員、である。

中央立法院

中央立法院は、「一七九三年憲法」に従って、人民によって直接に選任された代表〔議員〕で構成され、法律を提案し、また、法律の執行を保障し、政府を指導し、監視する、という二重の任務を有するものとされていた。上記憲法の諸規定と蜂起委員会の計画との間で著しく異なっていたのは、立法院議員 *législateur* は幾つかの場合には自分たちの

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀（七）

六九（461）

意見について責任を負う、とする点であつた。

国民意思保持院

国民意思保持院は新しい制度であつて、主権会のさまざまな決定 *decisions* を取りまとめ、主権者の意思を公表することを目的としていた。

〔蜂起委員会〕さらにこの院を、立法院議員たちがデクレ公布権の濫用によって立法権を侵害することのないよう、監視することを任務とする、一種の護民院とするつもりであつた。

保持院議員 *Conservateurs* の人数および彼らの職務の任期について方針が決まったとの記憶は私にはない。しかし私は、元老会員 *sénateurs* 総体の中から人民の直接選挙によって保持院議員を選び出すよう人民に促すことで意見の一致を見ていたことをはっきりと覚えている。

法の形成

以上のことを前提にしつつ、法を形成する二つの方法が構想されていた。すなわち、法は、あるいは中央立法院を、あるいは個々の主権会を源としよう、とされていたのである。

前者の場合には、中央院は主権会に対して理由書とともに法案を送付することとなつていた。〔主権会における〕人民の討議の結果は保持院に送られ、保持院は、主権者の各部分の票決結果を公表することによって国民の意向を公示するのであつた。後者の場合には、どの主権会も新しい法律を提案したり、あるいは古い法律の廃止を提案したりしうるとされていた。同じ提案が国民の過半数によってなされたときには、保持院はそのことを立法院に通知するのであり、立法院は人民によって要求された法律を起草し、人民の承認に委ねる義務がある、とされていたのである。

立法院による侵害を防ぐための保証

立法院が、デクレの形で現行の諸法律に反する法的措置をとることによって、主権を侵害するようなことが生じた場合には、保持院議員たちの行動が人民の審判を生じさせるために必要となる、とされた。この行動に関しては、蜂起委員会において見解の相違が、あるいは少なくとも不決断が存在していた。大きな権力 *autorité* を帯びた議会の性急さや野心を押しとどめる必要性を全員が認めてはいたが、保持院議員たちに帯びさせるべき権限 *pouvoir* については全員が一致していたわけではなかったからである。すなわち、一方に彼らの介入は人民に対する訴えに限定されるべきである、と考える者がいたが、他方には、主権者の決定が下されるまでは、異議申立てを受けているデクレの効力を中断する権限を彼らに対して付与するのが有効である、と思う者もいたのである。

この院の権限の分割

この点に関しては、中央立法院による権利侵害についての現実の危惧を除けば、すべてが曖昧なままであったが、この危惧からはまた、法律を起草することに限定される部門 *section*、そして、これに対していまひとつ、その諸権限を保持院議員によって制約されつつ、デクレを通じて政府を監督し、抑制する部門という、二つの部門にこの立法院を分割する計画も生み出されたことがあった。

立法機関を分散させることの利点

これはど多数の会議体（区）とにひとつの主権会、そして中央立法院と保持院に主権を分散させることが、徒党 *factions* とうわべだけの雄弁とにもあそばされる危険にいつそうさらされやすい単一の機関に主権を集中させることと比して大きな利点を有していることは、容易にお分かりいただけるであろう。さまざまな民主政に対して無節操や性急

という非難が浴びせられているが、法律に変換される前に数多くの段階を踏んで討議がなされる体制の下では、それらを危惧する必要はもはやなくなる。これらの観点からすると、こうした法形成の仕方は、習俗の質素さと利害関係の一律性とを支えとしているだけに、また、すでに名前を挙げた元老会制度によって、人間の誤りに対するきわめて強力な保証を提供しているだけに、他のいかなる仕方よりも好ましいものである。

人民はさまざまな誤りに対して予防策を講じるべきである

主権が当然にも人民の自然権に属している以上、人民の行為はいかなる意思に従わせることもできず、またけっして上位の存在を認めることもできないのであって、そのようなことがあれば主権は必ず破壊されることとなる。人民が行なう真に法的な諸決定は必然的に正しい意図に命じられたものとなる。しかし、人民は人間で構成されているがゆえに、誤りを犯しかねないのであって、誤りから身を守るために予防策を講じておくことは、用心深いことであり、また人民にとって有益でもある。

それゆえにこそ、人民に沈黙を余儀なくさせるか、あるいは人民の意思による決定 *actes* を特別の裁可 *sanction* に従わせることによって、人民から主権の行使を剥奪することが、時効によって消滅しえない権利に反するとすれば、同じこれらの権利を維持するために、それらが賢明かつ有用な決定のみを表明するように、知性と助言で包むことが正当かつ必要でもある。

元老会

蜂起委員会は、そうした支えを自然の中に捜し求め、古代（ローマ）の立法者に倣って、それらの支えを老人の経験と慎重さのうちに見出した。委員会が望んでいたところによれば、助言という任務に限定される元老会の意見を聴取し

ない限り、主権会は正式に討議することができず、その後に元老たちは（他の）市民たちとともに投票するのであった。保持院議員が元老会から選出されることとなっていたことはすでに述べたとおりであり、また、中央立法院を助言によって啓発することのみを任務とする元老院 *conseil d'anciens* なるものをも同様に元老会から選出することが話題となった。

元老会の最初の設立

しかしながら、時間のみがこうした制度に有用性と効率性をもたらしうる、ということを委員会は十分に承知していた。いつかは老人たちを平等社会の諸制度に執着させることとなるのと同じ習慣の力が、当時も今日も、世襲による君主政や宗教の謬見や財産権の魅力や卑屈な道德の教えに彼ら老人を結び付けていることを委員会は見抜いていたのである。

われわれが設立しようと望んでいた元老会は、平等と民主政的習俗の保持者でなければならなかったが、わが国の老人は大部分、平等のことも民主政の習俗のこともわかつてはいない。その上、これらの機関はその後になってからは新たな体制の守護者となるのであるが、初めのうちはその体制の宣伝者でなければならない、とされてもいた。

それゆえ蜂起委員会は、元老会を先ずはきわめて勇敢で熱意に満ち、また新制度をきわめて好んでいる市民のみで構成するつもりであった。そして一定期間についてはきわめて尊敬に値し、アロンディスマン〔区〕の人民の意に適う老人たちを補佐として付け加えることとされていた。

優すことのできない諸原則

以上すべてのことからして、蜂起委員会からすれば、幸福と平等は、公権力の配分に左右されるよりも、平等の維持

と平等を確立する諸制度への市民たちの執着とにはるかに依存する、ということとなる。彼ら〔蜂起委員会〕の構想した共和政には、国家の創設、institution と権力機関の配置、constitution とが存在していた。そして双方ともに、人民自身でさえ侵害することも修正することもできない本質的要素をもっている。傷付けられた場合には必ずや直ちに社会を解体させることとなるからである。前者にあっては厳密な平等が、また後者にあっては人民主権がそうである。これらの教理のもつ不可侵性は、一部の市民がそれらの教理を否認しつつ、それ以外の市民を隷属させる権利を不当に手に入れようと試みたような場合には、抵抗し、叛乱する権利を与えるはずの法によって、厳粛に認められることとなっていた。¹⁰

憲法の修正

自然法に属するこれらの基本点を除けば、その他はすべて、自らが樹立した権力機関を自らの好みのままに修正し、変更しうる人民の意思の下位に置かれるものとされていた。こうした教説を称えるために、またそれと同時にさまざまな悪巧みや騒乱によって共和国が曝されかねない危険から共和国を守るために、憲法について議論するべく、主権会が定期的に招集されること、また、主権会が〔憲法規定の〕変更を要請した場合には、要求された改正を規則に従って提案する任務を少数の賢人が負うことを、われわれ蜂起委員会は望んでいた。また、定められた時期に専門委員たちが国民の状態を検討し、濫用の存在を認めたような場合には、その濫用を一掃することのできる措置を人民に対して提案することも望まれていた。

平等を享受している人民にはわずかの法律で十分である

このように秩序立って構成された立法権がもたらすとされた利点を評価するには、所有権をもたず、所有権が生み出

す悪癖も犯罪もなく、商業がなく、通貨がなく、租税がなく、金融がなく、民事裁判がなく、そして赤貧も経験しなくなる人民は、ヨーロッパのいくつもの文明社会が苦しめられている多数の法律の必要性を覚えることはないであろう、ということは何よりも想起しなければならない。

農業と有用な工芸の監督は主権の主要な権限のひとつである

主権に関連することを終える前に、農業および工芸の最高運営権は主権の主要な権限のひとつとされることとなつていたと指摘しておくことは役に立つことであろう、と私は思う。法律によって方向性が示される一般的な諸規則は、中央立法院によって敷衍され、これから読者に述べようとする執行機関によって実際に適用されることとなつていた。

執行機関

人民の意思が絶えず知られるように用心の上に用心が重ねられるならば、そして、喜ばしいことに、人民の意思による決定 *decision* を準備し、表明する任務を担った受任者〔議員〕たちが自分たちの意志を人民の意思に置き換えることができるにいてゐるならば、残るは、行政官が市民に対して法律の意思以外の意思に従うことをいかなる場合にも強制しえないような仕方、また、彼ら行政官の行動が良俗と祖国への献身とを常に教える模範となるような仕方、人民の意思を執行することを担当する権力機関を整備するだけである。

人民の意思を尊重させるためには、行政官は国民の全権力に支えられていなければならない。ところが、過失からであれ、背任によるのであれ、人民の意思から逸脱しようと思つたときには直ちに、彼は異議や反対にのみ遭遇するはずである。

執行機関の適正さをもたらす原因

このような行政は、そのメンバーを選任する方式、彼らの員数、彼らの職務の分担と期間、彼らに対して行なわれる監視、彼らに対して与えられる罰と褒美、そして何よりも、国民の習俗と祖国およびその法律に対して市民が分別に基づいて抱く愛着、これらによってもたらされる結果である。

一七九三年憲法への補足

執行評議会 *conseil executif* に関する「一七九三年憲法」の諸規定は、不十分ではあるものの、妥当であると蜂起委員会には思われていた。委員会は、執行評議会の活動を法律およびデクレの執行に限定した条文〔第六五条〕とそれら〔法律およびデクレ〕の不執行について執行評議会に責任を負わせる条文〔第七二条〕とを称賛していたのであり、また、この憲法が是認した、この評議会の権限内の行政的職務と裁判所に与えられる司法上の職務との分離に同意し、この憲法が最高行政官 *magistrat suprême* の数および彼らの〔職務〕行使期間について規定したことに賛成していた。しかし蜂起委員会は、最高行政官の行動を調査するための方式を明確にすること、彼らの個々の義務違反に対する刑罰を定めること、彼らが称賛あるいは非難を受けるに値しうる場合にそれとを彼らに与えるに際して採るべき形式を決定すること、また、人民に対する背信行為のかどで告発された受任者および最高行政官を訴追するための迅速かつ簡単な手段を設けること、以上のことが重要であると考えていた。

さまざまな行政官職の性質と目的

安全と防衛のために、そして委員会の構想した体制の下では、人民の暮らしそのもののためにも、法律の最初の受託者による推進力が共和国の隅々にまで急速かつ画一的に広まることが是が非でも求められる。したがって、それぞれが

直ちに頂点の揺れに反応する環からなる長い鎖によって国が覆われることが必要である。これらの環とは、国土のあらゆる地点において市民に真の利益を想起させるために、また、法律によって示される人民の必要を満たすために設けられる下級行政官である。

したがって共和国には、さまざまな審級（権限等級）を経て、執行評議会から主権者と臣民との間の接点をなす行政官へと下降する行政官職の階梯が存在する。

同じような、ただし完全に司法面での階梯が、法律違反を確認し、訴追することを任務とする司法官から法の斉性をいたるところで維持することを任務とする最高裁判所へと上昇する。

ある種の行政官は生産的な仕事を指導し、それらの仕事に由来する財の公平な配分を調整し、また別の行政官は市民の間での協調を維持する。国家の防衛に留意し、人びとの心に勇氣と勇猛心の種を蒔く行政官がいれば、法律に背く人びとに法律による重罰を加える司法官もいる。また、弱者を支援し、惑わされた人びとを教化する行政官がいれば、自由や莊嚴さによって、また公開の集会や祭典にあふれる品位や歆喜によって、絶えず祖国愛に新たな糧を提供する行政官もいる。

「一七九三年憲法」を基礎とするこの体制の細部すべてに立ち入るとなると、長ったらしくて退屈なものとなるであろうし、そうしたことは無駄でもあろう。例えば、「一七九三年憲法」は、一方では裁判所を設置し、他方では、国民経済を担当する他の行政官が服従するものとされた中間的行政機関と市町村機関を設置してもいる。

文民職と武官職との結合

同じこれらの市町村機関には、それらの機関が組織し、監督する任務をもつ軍隊社会が結び付けられていた。彼ら〔蜂起委員会〕の述べていたところによれば、戦争が政府および人民の判断以外によってなされることがけっしてない

ようにするために、あらゆる紛争が不可能となるようにするために、また、將軍たちの行動にさほど不安を抱かなくともすむようにするために、文民行政官が軍隊の上級職を占めることが望まれていた。

前述のように確立される原則の数と同じ数の結果としてもたらされる権力機関のすべての部門をフォローすることは賢明な読者にお任せするとして、私は、どのような手段によってこれほど多数の行政官を法の範囲内に抑えうることが期待されていたのかを説明するにとどめておこう。

事実、かつていかなる国民もこれほど多くの行政官を、擁したことはない。しかも、どの市民も幾つかの点から見て、自分自身と他者とを監視する行政官になることとなっていただけに、公職はきわめて増加し、行政官もきわめて多数となったであろうことは確実である。

そうした職務の総体は、人民に食料を供給し、衣服や住居を提供し、人民を教育し、啓蒙し、指導し、そして防衛するために必要な活動すべてで構成されているのであり、厳密に言えば、市民はみな、公務員 *fonctionnaire* であるか、「かつて」公務員であったこととなる。全員が参加する職務と法律によって行政官に割り当てられている職務との間にある差異は、後者がもっぱらそれ以外の職務を指導し、保護することを目的としている、という点にある。われわれはそれを公職 *fonction publique* と呼んでいるのである。

行政官は普通の市民以上には経費がかからない

しかしながら、行政官のこれほどの数の多さに心悩ませるのは見当違いであろう。それらの行政官はほぼ全員、彼らを取り仕切る仕事を義務付けられているのであって、より大きな積極性を示す模範ということ以外に何の威信ももっていないからであり、あるいは年齢のゆえに辛い労働を免除される範疇から選ばれるからである。したがって、彼らのうちの誰ひとりとして、ごく名も知れぬ市民以上に共和国にとって経費がかかることはないのである。

習俗の質素さは行政官の誠実さの保障である

人民を構成するあるひとつの部分に偉大な人民の法律を適用することを任務とする行政官が、法律に厳密に従うことによって、その部分から尊敬と愛着を受け、彼が法律に違反することによってしかその部分を不快にしないほどになることは、社会体制の大きな驚異である。こうした驚異が現実のものとなりうるのは、習俗の質素さが国家のあらゆる部分に同じ精神と同じ利害関係をもたらしている場合だけなのであって、蜂起委員会の目差していた目標はまさにそこにあった。

行政官職の階梯

蜂起委員会の見方からすれば、人民が自分たちの行政官を作り出し、監視し、支える存在なのであった。委員会は、間違つて信頼を寄せたという後悔を人民にさせないことを望んでいたがゆえに、平等への深い愛を抱いていることを示したのでなければ、また、同じ範疇の下級行政官職すべてを段階的に務めたのでなければ、誰であれ、人民の投票によってきわめて高い行政官職に就くことはできない、とする法律に注目していた。委員会は主権の行使に際しては人民に無制限の自由を与えるべきであると信じていたことから、主権の行使に対してこの規定を適用することは全然考えていなかった。しかし委員会には、きわめて重要な職務には分別盛りの人間しか就かせないという利点に、さらに、そもそも虚栄や高慢や貪欲の放棄と市民の道徳および習俗の好ましい変化からしか完全な成功を期待しえない改革精神をより上手く保持する、という利点がこの規定によって付け加わるように思われていた。

改革当初は、行政官職は革命家にのみ任されるべきである

当然のことながらここで、元老会について述べた際になされた考察（本章「元老会の最初の設立」の項を参照）が思

平等をめざす、いわゆるパブーフの陰謀（七）

い起こされる。高齡者たちは、樹立される平等社会を保持するのいつかは打ってつけとはなるが、こと平等社会の樹立について言えば、彼らには不可能なことであるし、危険なことでもある。正真正銘の共和国を確立するのは、同時代人たちの勇氣や理性を凌駕する勇氣と理性とを備えた、人類および祖国の公平無私な友たちのみが果たすべき役目なのである。確立した共和国の精神が市民および行政官の精神を形成する。しかし当初は、共和国の精神を創り出しうるのはただ、もっとも賢明かつ熱烈な改革推進者のみである。したがって委員会は、まず最良の革命家たちのみで構成される行政官職が、漸進的に、かつ国民再生の進捗に応じてのみ、憲法的諸法律の全面的適用によって入れ替えられることを強く望んでいた。

ここまで本書を読んできてくださっている読者には、われわれ陰謀家の政治的諸原理について、また、それらの原理をフランス共和国に適用しようとする彼らが計画した際の手段について、十分に理解していただけているものと思う。

漸進的な展開

「しかし」それらの原理が、瞬時に、天地創造にも似た行為によって実際に適用されるのを目の当たりにするという大それた希望を彼ら陰謀家が抱いていた、とする誤解を抱く者は誰ひとりいないであろう、と私は信じている。彼らは、克服すべきさまざまな障害を十分に承知していたのであって、彼らの計画している改革が強力で持続可能な共和国を確立する唯一の手段であると確信し、国民の精神の発展、革命分子の活動の復活、民主主義者たちの提携、人民の極度の不満、そして献身的な市民の勇氣のうちに、彼らが基礎を築いた革命を開始し、その革命を引き続き強化するための十分な資材を見て取っていた。

(1) 委員会においては、再生〔証拠書類 五〕訳注〔1〕を参照〕された社会が真にその信仰の維持に関心を抱く教理は、最高存在〔第二章訳注〔74〕を参照〕と靈魂の不滅性との教理だけである、と考えられていた。その理由は、委員会が述べていたところでは、法律には手の届きえない思考や行動に対する、誤りを犯すことのない審判者を市民が認めること、そして永遠の幸福は人類および祖国に対する彼らの献身の必然の結果であると確信すること、これらのことが社会にとって重要である、という点にあった。礼拝については、社会協約に対する敬意、平等の防衛、そしていくつかの公的祭典に限定されることを望んでいた。いわゆる天啓宗教はすべて、法律によって、徐々にその種が根絶されるべき病癖のひとつに数えることとなっていた。それまでの間は、公共の秩序、全員の友愛そして法律の權威がまったく損なわれないのであれば、各人が常軌を逸した行動をとるのも自由であるとされていた。以上が、フランス革命の間に平等の主要な擁護者たちが行なった宗教に関する教説であり、ロベスピエールの教説でもあって、彼が犠牲となった血なまぐさい断罪は、大部分、彼がその教説を弁護した際の勇気のせいであった。無神論者たちの錯乱、エベール派の誤謬〔第一章の原注〔19〕を参照〕、ダントン派の不品行〔同上〕、ジロンド派の傷ついた自尊心、王党派の陰險な策謀、そしてイギリスからの資金、これらがテルミドール九日にフランス人民と人類の希望を裏切ったのである。

(2) 現実のものであれ、暗黙のものであれ、社会が依拠している協約*pacte*には、諸個人のもつあらゆる活力と能力のすべてとの共同利用*mise en commun*が必然的に含まれている。さもないければ、諸個人は当初から配分が不平等であると感ずるのであって、その協約はすべてが一部の人びとにとって有利に、それ以外の人びとにとって不利益になるからである。この基本的な協約の結果、広さがどのようなものであれ、国土は全部、そこに住んでいる人民の当初からの所有物である、ということとなる。ところでその人民は、一部の人びとを他の人びとよりも厚遇することを望むなどということはありえないのであって、人民がその諸權利を完全に行使しているときには、必然的に、平等な労働による不平等な生産が公平な配分によって埋め合わされることを要求するのである。

(3) 神性、主要な自然現象、有用な技芸、美德、人類にとって好都合な政治的革命、そして人類に奉仕し、人類の誇りとなっている偉人たち、以上が、それらの祭典によって人民の精神に刻み込むべき主題だったのであり、それらの主題の基本構想は、宗教思想についてロベスピエールが行なった忘れたくない報告に続いて採択されたデクレによって与えられていた。

平等をめざす、いわゆるパブーフの陰謀（七）

〔*1〕 一七九四年五月七日（共和暦第二年フロレアル一八日）に国民公会で行なった報告。河野編、前掲『資料 フランス革命』に富永茂樹訳「七五 最高存在の祭典（一七九四年六月八日）（一） ロベスピエール 最高存在の崇拝について（一七九四年五月七日）」（五〇〇～五一三ページ）として収録されている。

〔*2〕 演説と同じ日に採択された一七九四年五月七日の「旬日祭を設けるデクレ」。その第一五条において「来るプレリアル二〇日（一七九四年六月八日）、最高存在に敬意を表する国民祭典が執行される」と規定。

〔4〕 外国人に対するこうした警戒は、他人の不幸を喜び孤立精神からではなく、すべての人民が相互に負っている義務である、人類と友愛のための任務をより立派に果たしたいという欲求から余儀なくされていた。これらの義務のうち第一のものは、ある人民に対して他の人民が彼らの自然権を回復し、防衛するのを援助することを義務付けるものであって、蜂起委員会は、平等と自由とを基礎とする強固な制度という輝かしい模範を地上で真っ先に示すことによって、フランス共和国がその義務を履行すべきである、と考えていた。委員会の見方によれば、侵略が必然的に征服や支配という考えを随伴するからであれ、友愛のもつ響きが戦争に伴伴する暴力とは相容れないからであれ、これほどに偉大な恩恵は武器の力によっては伝ええないものであった。それゆえ、世界に対して準備されていた偉大な模範を有効なものとしようと望むに際して、新たな社会体制からその樹立を遅らせたり妨げたりしかねないものすべてを注意深く排除しなければならず、したがってまた、敵対する諸政府が人類愛を口実に、フランス国内で不和の種を蒔き、徒党（*factious*）を形成しようという陰險な意図に基づいて必ずや撒き散らす外国人の群れをフランスの国土から厳しく追い払わなければならなかった。その上、共和暦二年の経験は、警戒をおろそかにするにはあまりにも最近のものであった。外国の諸国民との完全な意思疎通（交通、往来）は、それらの国民の習俗や諸制度を、またとりわけ政府を危険としか見做さなかったことであろう。またそれまでは、フランスはそれらの国民の内、とりわけ南フランスにおける反革命「ヴァンデの乱」「奥党の乱」に加えて、スペイン、オーストリア、プロイセンなど国外からの反革命への対応に追われていた。

〔5〕 「一七九三年憲法」によれば、過半数の県的第一次会の一〇分の一が暗黙の承認を行うことは全体の同意に相当する。この規定は、あまりにも頻繁に開催される集会（第一次会）によって人民を煩わせないことを目的としていたのであり、また、この憲法の前に置かれている「人権宣言」によって維持された個人的所有権の帰結であった。この権利が消滅させられるか、

あるいは著しく制限されることとなる以上、人民が私事を理由に公務を顧みない危険は消滅するのであり、また、無知と邪悪な術策との効果である沈黙がしばしば同意を推定する根拠とされかねなかったのであるが、その国民の同意の証拠に關していっそう嚴格なものとすることは正当なことである。平等によって法制が簡素なものとなっている国においては、しかも一般的な事柄について規定するのではない措置²²²は法律ではないということを考慮するならば、政治的な集會が何度も開かれることを危惧するのは誤りであらう。

〔*1〕「九三年憲法」第五九条は、「提案された法律の送付から四〇日後に、過半数の県において、各県の正式に構成された第一次會の一〇分の一が異議申し立てをしなかったならば、法案は承認され法律となる」と規定していた。

〔6〕エペール派とロベスピエール派が同じ旗の下に結集²²³していた。

〔*1〕本文における「提携²²⁴ reunion」、原注における「結集²²⁵ ralliement」とは、ボドゾン、クレマンヌ、マルシャンらエペール派に属していた人びと、そしてブオナローティ、ダルテ、ドゥボン、デュブレらロベスピエールの立場を信奉していた人びとが「平等派の陰謀」に加担していったことを意味している。ブロンテールによる英訳版では、前者に「迷える民主派」、後者に「見識ある民主派」という形容を付している。

〔1〕古代エジプトでは、死者は、死、復活、豐饒を司るとされた神オシリスの姿をとってよみがえり、永遠の命を手に入れるとされていた。そのためには、死者は、地上で悪い行いを犯さず、高潔であったことを神々の前で証明しなければならなかった。女神アマトの羽根と死者の心臓とが天秤にかけられ、釣り合った場合にその死者は罪なき者と認められて、オシリス神の支配する冥界で永遠の生命を保証されることとなっていた。

〔2〕政治体²²⁶ corps politique。政治的諸權利（參政權）を行使する市民の總体を指す。「国民」と訳されることもある。

〔3〕「九三年憲法」第二一〇条は「フランス人民は、自由の大義のために祖国から追放された外国人に保護²²⁷を与える。フランス人民は、压制者を保護することはない」と規定していた。

〔4〕主權會および立法院は、それぞれ「九三年憲法」における第一次會と國民議會に相當する、と考えられる。

〔5〕「九三年憲法」の「憲法」第一一條は「第一次會は、各カントンに六ヶ月以上居住する市民によって構成される」と規定。

平等をめざす、いわゆるパブーフの陰謀（七）

〔6〕「九三年憲法」は、その「憲法」第二三条において「人口三九、〇〇〇人から四一、〇〇〇人で構成される第一次会の各集會は、直接にひとりの議員 *député* を選任する」と規定していた。

〔7〕「九三年憲法」は、その「憲法」第四三条において議員が「立法院の内部において述べた意見を理由として、搜索され、訴追され、裁判されることはない」と規定。

〔8〕護民院 *tribunal*。ボナパルトによるブリュメール一八日クーデタの後、共和暦第八年ブリュメール二二日（一七九九年一月一三日）の「フランス共和国憲法（九九年憲法）」によって一八〇〇年から〇七年まで存在した立法機關のうちのひとつ。政府が提案する「法案を審議」し「法案の採択または否決を票決」し、「憲法違反を理由としてのみ、被選資格者名簿、立法議會の決定 *acte* および政府の決定を元老院に付託する」（「九九年憲法」第二八条）などの機能を帯びていたのであつて、「法制審議院」という訳語が充てられることがある。*tribunal* には古代ローマの護民官職の意味もある。

〔9〕元老院 *conseil des anciens*。ユダヤ教、プロテスタントにおいては長老會議を指す。「共和暦第三年憲法（九五年憲法）」によって設けられた元老院は、五〇〇人院の被選挙権が満三〇歳以上であるのに対し、満四〇歳以上となっていた。その任務は、五〇〇人院の決議案を承認あるいは否決することにあつた。「九五年憲法」第八六、八八条および第九五条を参照。

〔10〕「一七九三年憲法」の「人權宣言」第三三条、第三四条および第三五条の規定の要約である。

〔11〕執行評議會 *conseil exécutif*。そのものについて規定した「九三年憲法」第六二条以下第七四条まで、および、立法院との關係を規定した第七五条から第七七条までを参照。

〔12〕臣民 *citoyen*。政治的諸權利をもたない人びとのことを、すなわち、参政権・市民権をもたない人びとのことを指すか。ただしド・メーストルは「人民は主権者である、と言われているが、では、誰に対する主権者なのであるか。明らかに自身に対する主権者である。したがって、人民は臣民 *citoyen* である」という言葉を残している。

〔13〕「一七九三年憲法」の第八五条から第九五条で民事裁判について、第九六条から第九七条で刑事裁判について、また破毀裁判については第九八条から第一〇〇条で規定。

〔14〕中間的行政機關 *administrations intermédiaires*。「一七九三年憲法」はその第七八条から第八四条までの条文で地方の行政機關 *corps administratifs et municipaux* について規定しているが、中間的行政機關とは、コミューン（市町村）と県との中間に設置されるディストリクトに設置されるものを指す。

第八章 教育——新しい習俗の涵養

改革を完遂し、保持する手段としての教育

野心や貪欲を抑え、新しい習俗を植えつけ、また、人民が生来もつ善良さを可能な限り伸ばすためにおよそ考えつきうるあらゆる手段の中で、効果は緩慢ではあるが、国家を改革する人びとが全面的に利用する術を弁えておれば、絶対に確実な手段がひとつある。教育〔徳育〕である。

改革者たちの手に委ねられた場合には、教育は、祖国への愛と自由および平等の諸原理とを神聖不可侵のものとすることによって、国民の様相をすっかり変えたことであろう。いったん偉大な機構が構築されたときにも、その機構をよりよいものとし、強化し、永続的なものとするのは、やはり教育の役目であるとされていた。

したがってわれわれは二つの視点から、すなわち、まず初めに、樹立された共和国が手にする体制保持的な制度として、次いで、改革者の手に委ねられた再生〔証拠書類 五〕訳注〔一〕を参照〕の手段として、教育を考察しなければならぬ。

われわれの感情と知性とがわれわれに感動を与える作用を通じて変化を受ける年頃が存在する。われわれの教育はまさにこの作用のうちにある。教育はわれわれを善人にも悪人にもするのであり、また市民にも強盗にもするからである。

社会は教育を指導しなければならない

社会はその構成員の意識と活力によってのみ、自由であり、幸福であり、また繁栄しうるのであって、構成員の教育に何らかの影響を及ぼしうるものすべてに社会が直接に注意を払う権利以上に明白な権利はひとつとしてない。社会は、

平等をめざす、いわゆるパプーの陰謀（七）

自らの将来的な運命が教育に左右されるがゆえに、そうした注意を払わなければならないのである。

両性の分離

種の自然の区分から二部門の教育が生じてくる。すなわち、ひとつは男子教育、いまひとつは女子教育である。社会が自らに設定すべき目標は同じではあるが、しかし自然が両性の間に設けたさまざまな差異は、双方の性について区別することなく同じ方式を採用すれば、必ずや自然の法則に逆らうことになる、とわれわれに警告している。その上、諸個人の活力と維持とにとっては、両性が混じり合うことによって促進される恋愛感情の進展を遅らせることが重要である。したがって、両性が別々に教育されることが得策なのである。

蜂起委員会の考えでは、教育は

国民的で、

共同で、

平等なものでなければならなかった。^①

教育は国民的である

国民的とはすなわち、法律の規制を受け、行政官によって指導される、ということである。教育は改革を仕上げ、共和国を維持し、強化すべきものであって、共和国のみが青年に教えるべき習俗と知識とについて唯一権限をもつ審判者である。他方では、教育の主たる目標は、排他的で自己中心的な家族制度によって妨げられ、拒否されている全般的な友愛感情を万人の心の中に深く刻み込むことでなければならぬ。

共同の教育

共同のものはすなわち、教育が、同じ規律の下で生活するすべての子供について同時に運営される、ということである。自分たちの同胞市民を兄弟としか見做さず、自分以外の人びとと喜びや感情を共にし、同類たちの幸福のうちのみ自分たちの幸福を見ることに若者が早い時期から慣れることが肝要である。さまざまな教育共同体は大きな国民共同体を忠実に再現しているのであって、善良な市民はすべて、自分の行動や楽しみをこの大共同体と関連付けなければならない。

平等な教育

平等な教育であるというのは、全員が祖国の大切な子供だからであり、不平等によって必ず妨げられてしまう幸福を手にする権利を全員が同じようにもっているからであり、また、教育の平等から最大限の政治的平等が必ず生まれるからである。

教育は傑出した行政官によって指導される

この点について蜂起委員会が抱いた計画を理解するには、最高行政官職が共和国のきわめて重要な職務の中で年功を積んだ老人たちで構成され、下級行政官の助けを借りてあらゆる教育施設を指導し、最高行政官の中から選ばれた視学官を通じて法律と最高行政官の命令との実行を確実なものとし、また、最高行政官の許に教員の教育に留意する教員養成学院 *seminaire* が附属している姿を思い浮かべていただきたい。

児童への配慮

委員会が構想した社会体制の下では、生まれたばかりの個々人を祖国が奪い取り、死に際してようやく祖国の手許から離すこととされていた。祖国は、個々人の誕生の面倒を見、子供に対してはミルクと子供を産んだ母に対しては世話を保障し、子供の健康を蝕み、身体を弱らせかねないものすべてを子供から遠ざけ、うわべだけの優しさの危険から子供を保護し、真の市民にとって必要な美德と知恵とを身につける国民舎 *maison nationale* に母の手で子供を連れて行くのである。

各アロンディスマンに二つ、すなわちひとつは男子用の、いまひとつは女子用の教育舎 *maison d'éducation* を設けることをわれわれは望んでいた。また、空気のよい場所、田舎、都会から離れた場所、河川の近くの方が選ばれることとなっていた。

両性の生まれつきの差異

男性は生まれつき運動と活動に向いているのであって、祖国を豊かにし、祖国を防衛しなければならない。これに対して、女性に男性よりも弱く、妊娠のもたらす不調や出産の苦痛やそれらにしばしば付随して生じる病いを被りやすく、しかも異性に大きな影響力を及ぼす魅力を授かっているのであって、より骨が折れず、またより騒々しくない労働を運命付けられているように思われる。また生来、情念の激しさを鎮め、人間のさまざまな不幸を和らげ、美德の実践に大きな褒美を与える才能を天分として授かっているように見えるのである。これらの消し去りえない差異の結果、両性の教育はすべてにおいて同様ではありえない、ということとなる。まず、男子教育について述べよう。

教育の目標

蜂起委員会の考えでは、国民教育は以下の三つを目標としなければならない、とされていた。すなわち、

一、体力と身体の敏捷さ、

二、優しい心と気力、

三、知性の発展、という三つの目標である。

身体

市民の健康および体力は、何よりも共和国の幸福と安全とを左右する条件である。市民の健康および体力は、諸器官を動かすことによって、また、動物性機能〔感覚や運動に関わる機能〕を妨げる原因を退けることによって獲得され、維持される。それゆえ、辛い労働や運動や節酒や節制の必要性が生まれるのである。祖国の期待の的である青少年は、したがって、農業および機械仕事のもっとも苦勞の多い労働で鍛えられ、きわめて難しい運動の習慣をつけ、ごく質素に生活しなければならぬ。軍事演習、競走、乗馬、レスリング、拳闘、ダンス、狩猟そして水泳は、新しく生まれてくる世代のために蜂起委員会が準備していた競技であり気晴らしであった。委員会は、国民教育舎から怠惰と無為が放逐されることを望み、また、無気力や享樂好きがフランスの青少年の心に忍び込むためのただ一筋の道も見出しえないことを望んでいた。

教育舎の配置

委員会が構想していた教育舎は、そこに収容されることとなるさまざまな年齢と同じ数の部屋に区分されることとなっていた。また、ここには共同で食事をとる部屋が、あちらには生徒一人ひとりが自分の好みの技芸の訓練をする作業場

が、また一方には、あるいは農作業に従事し、あるいは天幕の下で軍隊式の宿泊をする青少年の姿が見受けられる広大な畑が、また他方では、競技のための体育館が、そして別の場所には授業のための講義室が設けられることとなっていた。

心

わが若者たちが経験する常に新しい仕事から、国家を構成する諸原理に似た感情が彼らのうちに生じるはずであった。彼らは、自分たちが目撃したさまざまな素晴らしさをあらゆるものの統率者である祖国に関連付けることに慣れ、また、自分たちの健康や幸福感や楽しみを祖国の侵すべからざる法律のおかげであるとすることに慣れたことであろう。いつも一緒に暮らしていることから、彼らはついには自分たちの幸福と他人の幸福とを同じものと見做したことであろう。しかも、私利私欲や野心の感化から守られていると同時に、経験によって、また、物語を通じて祖国の優しさを確信しているがゆえに、祖国に奉仕し、祖国の称賛に値しようという欲求が彼らの活動の唯一の動機となったことであろう。優越性やえり好みという考えから青年を保護するためにあらゆる策が講じられることとなっていた。これらの無垢と平安の場所においては、金銭や権力への渴望を呼び起こしうるものは何ひとつない。それゆえそこでは、平等と正義とへの熱烈な愛が若い市民たちの受ける初期の感銘と結びつくのであり、やがてこれらの若い市民にとって、さまざまな制度がかき立て、かくも心地よい祖国の名において推奨される美德〔平等と正義とへの愛〕が習慣となったことである。

工芸

幾つかの技芸 *arts* は社会の幸福にとって必要不可欠であり、社会の秩序と維持にはその構成員が〔技芸についての〕

かなりの知識をもつことが必要とされる。

指針も歯止めも設けないままに人間の知性を創造力の広大な世界においてさまよわせておくのであろうか。社会を洗練させ、改善するという口実の下に、要りもしないものへの欲求や不平等や言い争いや誤った幸福観を無限に社会の中に取り入れさせておくのであろうか。それとも、共和国の安寧にとってどうしても必要ではないものすべてを遠ざけることによって、製造業に限定を設けるのであろうか。

わが委員会は、贅沢品のもたらす嫌な思いを、そして、人びとを苛立たせ、差別を示すしとして以外には値打ちのない楽しみへの愛を、同胞市民から取り除こうと望んでいた。それゆえ、教育舎で扱う工芸 *metiers et arts* の仕事は、容易に万人に伝えうるものに限定することを全員一致で決定していた。委員会は、家具や衣服の趣味のよさと称されているものが田舎風の質素さに取って代わられることを望んでいたのである。整頓および清潔さは精神および身体にとって必要なものではあるけれども、あらゆるものが従うべき平等の原理が、隸属状態にある人びとの愚かな虚栄心を助長する華美や優雅さを消滅させることが重要である、と委員会は述べていた。

知性、学問

思弁的な知識に関して蜂起委員会のメンバーたちは、ある国民にとって抜きん出ること、噂となることほどどうでもよいことはない、ということ、古代の賢人たちから知らされ、近世（古代ギリシア・ローマとの対比でルネサンス期から啓蒙思想期を指す）の幾人かの真の哲学者に教えられ、またそう確信していた。それゆえ彼らは、共通の義務を免れる口実すべてを、また、自尊心をくすぐり、誠実さを惑わし、社会の幸福とは異なる個人的幸福に熱中させる機会すべてを、似而非学問から奪い去ることを望んでいた。

彼らは、所有権の廃止のうちに、法律を勉強する者と法律が守ると称している人びとにとって嘆きの種である、あ

の分厚い判例集〔法律学〕の廃止を看取っていた。彼らはまた、あらゆる種類の神学的議論を一掃する固い決心を抱いていたのであり、賃金がなくなることによって、やがてわれわれは、才人ぶりをひけらかし、書物を書く癖から解き放たれるであろう、と感じていた。

彼らが述べていたところによれば、市民の知識は、市民が平等、自由そして祖国を愛するようにし、また、市民が祖国に奉仕し、祖国を防衛できるようにすべきものであった。彼らがさらに続けて述べたところによれば、それゆえフランス人は皆、自分の言語を話し、読み、書くことができなければならない。これほど広大な共和国においては、書かれた記号〔文字〕が共和国のさまざまな部分の間での唯一可能な意思疎通手段だからであり、また、それ〔自分の言語〕以外の知識もその手段に由来するからである。万人が国民の富を保管し、配分するよう要請されるがゆえに、誰もが算術に詳しくなければならない。誰もが、正しく推論を行ない、簡潔かつ正確に自分の考えを表明する習慣を身につけなければならない。自分の国の歴史と法律を知らない者はひとりもいてはならない。歴史は、共和国が消滅させた災禍を知り、共和国が源泉となっている幸福とを知る術を教えるからであり、また法律は、これを勉強することによって誰もが自分の義務を知り、行政官職を務めること、また、公務の面で見解を表明することができるようになるからである。すべての者が、自分たちを保護してくれている権力について、また、かくも大きな機関のすべての部分を各個人のこの上ない幸福に向けて貢献させている諸制度の思慮分別について正しい理解を得るように、共和国の地誌、博物学そして統計を知らなければならない。〔最後に〕祭典を美しく飾るために、皆がダンスと音楽が上手にならなければならない。

蜂起委員会がフランスの青年のために用意していた教育はほぼ以上の如くである。委員会にとっては、教育は特に好んで扱われた主題であった。委員会は教育を、社会的平等と共和国とのもつとも強固な基礎と見做していたからである。こうして、辛い労役に慣れ、農業と必要な工芸の訓練を受け、役に立つ知識を身につけた若者たちは、少しずつ全市

民の希望と慰めの種となるのであり、市民は若者たちのおかげで労働が軽減され、公的な祭典の際には楽しくて感動的な気晴らしを受け取ることとなっていた。

もはや家庭での教育は行なわれず、父権ももはやなくなる。しかし、法が父親たちから個人的な權威のうちで剥奪しようとしていたものを、法は父親たちに共同で一〇〇倍にして返還したことであろう。先に〔第七章を参照〕言及したことのある元老会は、各アロンディスマンにおいて教育舎の舎監となるはずであった。そして彼ら舎監の指導の下で女性(femmes)もまた、結婚の時まで共同で教育を受ける女子 filles の教育に留意するよう要請されることとなっていた。

女子教育

国家(市民共同体 *citoyen*) が丈夫で勤勉な人間しか含まないようにするために、国家に市民をもたらすこと(出産)を自然によって運命付けられている人間〔女性〕に対して立派な体格を保証しなければならない。したがって、労働と運動を通じて彼女たちの身体を辛い仕事に耐えられるようにする必要がある。陰謀家たちの述べていたところによれば、運動と仕事は共和主義的教育の大きな手段なのであった。それらは、所有権と差別がないことと相俟って、お洒落癖を弱め、また恋愛感情の発露を遅らせることに貢献するであろう。

彼ら陰謀家はさらに次のように続けていた。女子は、共同の責務である労働が情念に対する歯止めであり、また家庭生活にとって必須なものにして魅力でもあるがゆえに、農業および工芸のうちでごく骨の折れない仕事の訓練を受けることとなる。彼女たちは、慎みが健康の番人であり、愛に興味を添えるものであることから、慎み深くなるであろう。

彼女たちは、男たちに祖国を愛させることが重要であるがゆえに、祖国を愛するようになり、したがってまた、祖国の法律の思慮分別を彼女たちに称賛させるのに適した勉強に参加することとなる。彼女たちは、われわれの祭典に彩りを添える国歌斉唱の訓練をうけることとなる。最後に彼女たちは、快活さと無邪気さが恋愛の第一楽章を司り、将来の結

婚の前ふれとなるように、人民の見守る中で、男子の遊戯に参加することとなる。

ようやく「蜂起」委員会がおおよその計画を立てたばかりであった、かくも新しい制度についてその細部すべてに立ち入ることは私にはできない。その上、共同で平等な国民教育の大目的が、立派な行動の習慣によって、またかくも愛すべき祖国の幸福に貢献する喜びから、献身的に共和国に奉仕する頑健な市民を育成することにあるはずであったことを知るだけで十分である。

軍事教育

委員会が構想した体制の下では、若者たちは国境近くに設けられる野営地へと教育舎から移ることとなっていた。彼らはそこで、外国からの侵略を撃退する態勢を常に整えつつ、軍事技術に磨きをかけることとされていたのであり、また、彼らはそこで、労働と楽しみの完全な共同体の中で暮らしつつ、辛い仕事や努力や粗食を通じて、自分たちの郷里に戻った際に市民権の行使を手に入れるために要求される資格を獲得するものとされていた。

陰謀家たちによれば、彼らの計画の成功はこの種の最初の試みの成功如何にかかっていた。彼らが語っていたところによれば、そのことだけで、平等社会を強固なものとし、革命の仕上げを行なうのに十分であるとされていた。そのことだけが、今の世代には不完全な形でしか取り入れることができない、共和主義的な習俗と主張との存在を明らかにしてくれるからであった。

教育集会

新しい法律の精神と公衆道徳の諸原理とをよりよく保持するために、教育 instruction 集会が開催され、そこにおいて各市民が聴衆に対し道徳および政治の教えについて説明し、国民の諸問題を聴衆に語ることができるものとされていた。

た。当局はこれらの集会〔場所〕の近くに印刷所と図書館とを設けることとなっていた。

出版の自由

こうした状態の中で、印刷はもっとも有効な意思疎通手段であり、また、人民主権に対する侵害を防ぐ最良の砦でもある。それによってのみ、広大な国家の市民たちが彼らの判断に委ねられる法律案について思慮深く意見を表明することが可能となるからであり、また、そのみが、公共の秩序を徐々に回復し、野心家たちの奸策を挫折させるからである。

しかし、個人的所有権が廃止され、また金銭的利益がいっさい不可能になっているとしても、またもや平等社会の正当さと人民の諸権利とを危うい目に遭わせたり、共和国を際限のない有害な議論に委ねる危険を冒したりすることがないように、期待しうる限り出版を役立てるための手段を考えておかなければならぬ。

出版の自由については、以下の諸点が蜂起委員会の検討に委ねられたことがあった。すなわち、

一、誰であれ、平等および人民主権という神聖不可侵の諸原則と正反対の意見を表明することはできない。

二、統治機関の形態および統治機関の行政に関する文書はすべて、主権会あるいは一定数の三〇歳以上の市民の要求に応じて印刷され、図書館に送付されねばならない。

三、何らかのいわゆる天啓宗教に関わる文書は、いかなるものであれ出版されえない。

四、国民意思保持院が共和国にとって有用な出版でありうると判断すれば、いかなる文書も印刷され、配布される、という点である。

われわれは教育について述べた際（本章「工芸」の項を参照）に、技芸の洗練と学問研究とが共和国の中に柔弱な習俗や誤った幸福観や危険なお手本や高慢と虚栄への刺戟を持ち込むことに蜂起委員会が反対するつもりでいたことを確

認しておいた。この問題は幾度も見直されたが、他の多くの問題と同様、委員会が自らの企てを断念せざるをえなくなったときには、まだ論じ尽くされていなかった。

技芸および学問の利点

技芸ぎぎの進歩によって、必要不可欠の労働が緩和されること、陸路および水路による交通がより容易になること、そして新しい楽しみが多数の共同の楽しみに付け加えられることが可能になる、と時々語られていた。

またさらに、技芸の理論を明示し、その実際への適用を教えてくれる学問がなければ、技芸はどのようなものとなるであろうか、とも述べられていた。時には学問によってさまざまな病気が治り、また予防されている。また、学問は人間に自分自身を知ること教え、人間を宗教的狂信から守り、暴政に対する警戒を呼びかけ、人間の余暇を魅力あるものとし、彼の魂をきわめて気高い美徳にまで高めている。

技芸および学問に由来する災禍

しかしわれわれは、事態を別の観点から考察することを通じて、技芸の洗練から贅沢品への嗜好、質素な習俗への嫌悪感、軟弱さや軽薄さへの好みが生まれてくることに気づいてもいた。われわれは、学問に身を捧げる人びとが、実際のものであれ、仮想上のものであれ、気づかぬうちに自分たちの知識を差別や優越的地位を手に入れる資格、共同の労働を免除される資格と見做すことを恐れ、また、彼らの学識について抱かれる評価が、彼らの虚栄心をかき立てることによって、単純であり教育を受けていない人びとの誠意を偽善的で危険な雄弁を用いて裏切り、彼らの権利に有害な結果をもたらす企てをついには引き起こすことを恐れていた。以上の悲しい考察のもつ重要性に、習俗および自由が技芸（芸術）および学問の輝きと結びついたことはかつてなかった、と歴史に基づいて述べた J・J・ルソーの見解の重

要性が付け加わっていた。

このテーマに関して何度も行なわれた議論の間に、技芸と學問に責任ありとして非難が浴びせられた諸悪は、その大部分が今日身を任せざるをえなくなっている利益への欲求を原因としているがゆえに、共同体の樹立が貧困を絶滅させ、食欲を満たす可能性が消滅するやいなや、おそらくそれらの諸悪は姿を消し、学生の数も著しく減少するであろう、との指摘がなされた。以下の諸点が提案されていたが、それらについてはいかなる決定も下されてはいなかった。

一、いかなる研究も共同の労働の免除を受ける権利を与えない。

二、行政官たちが人間の知識の倉庫の保持と増大を担当するものとする。

三、優れた素質を発揮するような若者は、教育舎を出たときに、勉強を続行するためにこれらの行政官の許に送られるものとする。

反論

蜂起委員会がさまざまな努力を通じて目差していた市民共同体の政治体制 *ordre civil et politique* の基本的なあらましは以上の通りである。この蜂起委員会に対しては、あるいはそれらの計画には根拠がないとして、あるいはそれらを実現することは不可能であるとして、反論がなされた。根拠のなさという点に関しては、われわれは本書を通じて、読者がそのことについての判断を下しうるようにしてきた。また、ごくわずかな改革にも苛立つ人びとによる月並みな反論である、実現不可能性ということに関しては、共和国の最初の二年間（九二年八月の王権停止から九四年七月テルミドールまで）のフランスの状態について正確に理解するときには、フランス人民が平等の大義に対して示した献身と彼らが指導者に寄せた信頼は当時きわめて大きなものであって、彼らが熱狂的に採択したものと民主政的な制度はひとつとしてなかった、と今なお確信しうることを指摘するにとどめておこう。これらの都合な傾向は、確かにテルミ

ドール九日の恐ろしい出来事によって弱められてしまった。しかしそれらの傾向は、蜂起委員会の活動の際に、またその後になってからも長い間にわたって、大部分公然とたち表れていた。しかも、それらの傾向は人民にとって当然のものであるがゆえに、それらを抑圧している原因が働かなくなるやいなや、直ちに表れるのである。根底的な改革に対する障害は、「市民の」大多数に由来するものではなくて、そうした障害はすべて、自分たちの労働の分担を他人に転嫁する秘訣を見つけた人びとの墮落のうちにある。したがって、彼らの発言を封じるがいい。そうすれば、彼ら以外の人びとは皆、あなた方 *Workers* に賛同し、あなた方を支援してくれるであろう。

それでもやはり、繰り返し述べることにはなるが、委員会は、事実としての平等社会の完全な樹立を早めうることすべてを何ひとつおろそかにしない決意を抱いていたとはいえ、蜂起の直後から事実上の平等社会をわれわれにもたらしうると思い込んでいたのではけっとなかったのであり、また、蜂起の時期を設定できるとも思っていなかったのである。委員会は、世論の進展に応じて、また、われわれが報告しようとする最初のさまざまな措置（第九章（次号）を参照）の成功に応じて、段階的に展開することの必要性を直感していた。（しかし）委員会が強固に確立したものが共同教育だけであつたとしても、委員会は人類に対して大きな貢献をなしたはずである。

原 注

(一) 生まれたばかりの共和国を自らの血で塗り固める栄誉に輝いたミシエル・ルベルティエはまた、共同で平等な国民教育案を革命が始まって以来最初に構想したという栄誉をも担った。起草者の美徳を物語る不朽の業績であるこの案は、しかしながら、まさにバンドラの箱である個人的所有権に由来するあらゆる災禍との両立を図らねばならなかったものであり、それゆえこの案は、その長所を著しく限定的なものとするさまざまな配慮を含まざるをえなかった。ルベルティエは、子供たちを五歳から一二歳まで共同で教育し、その後彼らを両親の許に帰すよう、提案していた。その年代ではいまだ微弱な感銘が、悪習と偏見の渦の中に若者たちが戻されて必然的に影響を蒙ることとなる謬見と悪い手本によって、大部分消し去られて

しまうことを危惧する必要はなかったであろうか。

〔*1〕 ルベルティエ、ミシェル Michel Le Peletier (ルイ・ミシェル・ルベルティエ・ド・サン・フアルジョー Louis Michel Le Peletier de Saint-Fargeau) (一七六〇年五月二十九日パリ〜九三年一月二〇日パリ)。「陰謀」に加担したフェリックス・ルベルティエ(第二章訳注〔32〕を参照)の兄。パリから三部會議員(貴族部会)に選出されたが、貴族制廃止を熱烈に主張。廃止直後からミシェル・ルベルティエとのみ署名。ヨンヌ県から国民公會議員に選出され、国王処刑に賛成、公教育の組織について案を作成。国王処刑の前日、パレ・ロワイヤルのレストランで暗殺された。七月一日にロベスピエールが公会の席上で公教育委員会の名においてルベルティエの「国民教育案」を朗読し、八月一日にその案を基礎とする法令が採択された。

〔*2〕 コンドルセ他著、阪上孝訳『フランス革命期の公教育論』岩波文庫、二〇〇二年、所収の「国民教育案(ルベルティエ)」を参照。

(2) この日のもたらしたさまざまな結果は、きわめて高いレヴェルの美德 *vertu* に到達していた多くの人びとを祖国と人類との幸福に対する絶望に導いただけに、いっそう大きな害悪をもたらすものであった。

(3) 共和暦第四年の民主派「パブーフら平等派」がフランスにおいて実現できなかったことを、最近ひとりの高潔な人物が別の手段によって、イギリス諸島とアメリカで実践しようと試みた。スコットランド人のロバート・オーウェンが、自分の国で享受と労苦の平等な配分の原則に基づく幾つかの共同体を自費で設立した後に、合衆国において、数千人の人びとが完全平等の快適な制度の下で平穩な暮らしを送る、同じような施設をいろいろと設立したばかりである。

この人類の友の助言にしたがって、ロンドンに設立された協同組合 *société coopérative* が、しばらく前から、共同体の諸原則を普及させ、実践的な模範によってそれらの原則を適用する可能性を明らかにしようと努力している。

パブーフは多数からなる人民をただひとつの大共同体にまとめようと試みた。これに対し、別の状況に置かれていたオーウェンは、ひとつの国に小共同体を数多く設けようと望んでいたようであり、それらはその後一般的な絆で結び付けられて、それぞれが大家族の中の諸個人「のような存在」となるとされていた。パブーフは、彼の仲間 *amis* が最高権力機関を奪取することを望んでいたのであり、その権力機関の影響の下で彼らが計画した改革を実行することができると思っていた。これに対してオーウェンは、布教と模範による成功を確信している。権力機関の助けを借りることなく、思慮分別によって

平等をめざす、いわゆるパブーフの陰謀(七)

かくも偉大な善事を行ないうる、ということをや彼が世界に証明できればよいのだが。何よりも彼が、彼の氣高い努力が失敗に終わるのを目にする苦しみを味わわないですめば、また、不首尾に終わる実験によって、激しい情念が燃るべき抵抗を對置し、文明化された国民の強烈な政治的激動の結果でしかありえないように思われていた社会体制（平等社会）を何らかのやり方で樹立する可能性に對する論拠を平等の敵たちに提供する、という苦しみを味わわないですめばよいのだが。

オーウェンの構想した体制に對しては幾つもの反論が提起されたが、それらはバブーフの構想した体制にも同様に當てはまる。そこでわれわれは、それらの反論をそれらのくだらなさを証明する反駁とともにお伝えすることとしよう。

第一の反論。それによれば、人間の間に存在する、身体的差異ゆえに、労働の配分および消費物の配分の面で、共同体の目的である、あの完全な平等を確立することはできない、とされる。

反駁。この点では、平等は労働の激しさおよび消費される品物の量によってではなく、勤労者の能力と消費者の必要性とによって測られるべきである。ある程度の体力に恵まれて、一〇リール（約五キログラム）の重さを持ち上げる人は、五倍の体力があつて五〇リール（約五〇キロ）の重さを移動させる人と同じくらい働いている。激しい喉の渴きをいやそうとして水を一瓶（〇・七五リットル）飲む人は、あまり喉が渴いていないために一シヨビヌ（〇・五リットル）しか飲まない彼の同類よりも多く楽しんでゐるわけではない。問題とされてゐる共同体の目的は、享受と労働の平等なのであつて、消費する品物および勤労者の仕事の平等ではまったくないのである。

第二の反論。それによれば、果物、野菜、乳製品、肉、飲料などの同じ種類の品物の品質にムラがあることから、配分において実質的な不平等が持ち込まれることとなり、この不平等が嫉みと口論とを引き起こし、社会を不和と敵意の場とする、とされる。

反駁。このような理屈を並べるのは、具合の悪い諸制度によって虚栄心や嫉妬心を抱かされ、お互いに反目させられてゐるわれわれ自身を基準にして、大いに兄弟愛に満ちた体制の下で育てられる人びとを判断するからにすぎない。果物も花も身の周りに豊富にあるというのに、人びとがある果物の味あるいはある花の甘い香りをめくって必ず嫉妬しい、憎みあい、いがみあうようになるなどと仮定することは、自然の創造者を侮辱することである。人びとから所有権を取り上げよ。そうすれば、あなた方 *you* はきわめて大きな害悪をもたらす彼らの情念を和らげ、お互いに傷つけあう理由をほぼすべて彼らから取り除くことになるであらう。その上、配分順序の点でくじ引きあるいは輪番制を用いることによって、問題とさ

れている些細な不平等をはるかに目立たないものとすることができるのではないであらうか。道徳や政治や経済においては、平等は数学的同一性ではないのであり、わずかな相違によって損なわれたりするものではない。スバルタでは良識と平等・融和と精神が些細な相違すべてを調整していたのであり、今日においてさえ、些細な相違が子沢山の家庭や寄宿舎や宿営の平和を乱すことはないのである。

第三の反論。それによれば、社会が各人の必要とするものを与える任務を担うとなると、誰も自分の生活の糧を手に入れるために働く必要性を覚えなくなり、生来怠惰へと流されやすい人間は、あらゆる労働を不可能としてみうような全般的な無頓着さに身を委ねる、とされる。

反駁。体格のよい人間には運動が必要であり、また、退屈を紛らせるために彼は、労働が過度なものでなく、かつ彼だけが労働を負担するのでない限り、労働を追い求める。これらの事態はどちらも共同体においては生じないのであり、また、そこでは万人が働くのであって、各人の仕事はこの上なく穏やかなものである。

これらの仕事への動機に、労働の必要性について万人が抱くと思われる確信、世論が怠け者に対して投げかけることとなる非難、そして今日では泥棒に課せられている刑罰を故意に基づく怠惰にも課す法律の厳格さを付け加えなければならない。第四の反論。それによれば、『第三の反論と』同じ理由から、知性と製造業にはいかなる進歩も見られなくなる、とされる。

反駁。とるに足らない賃金への欲求が出現させ、また、虚栄と怠惰にとつてしか価値をもたない製品は永遠に姿を消すであらう。なるほどそうなくても都合なことではないであらう。ただし確実に、祖国への愛を強固にし、万人の境遇を改善することを目差す、学校教育や研究については同様ではないであらう。一般に余暇が生じるだけに、そして、国民の感謝によって、またいかなる時代にも真に有用な偉大な活動や発明の動機であった、思慮深く授与される榮譽によって励まされるだけに、人びとはますます熱心に学校教育や研究に従事することとなるであらう。

第五の反論。それによれば、規則づくめで細部にこだわる共同体制度は、市民社会を修道院とし、自由を損なうこととなる、とされる。

反駁。土地を所有する修道士であれ、托鉢修道士であれ、修道士は農業や製造業のいかなる職にも従事しないが、これに對して、バプーフおよびオーウエンの共同体では誰もが彼の労働によって社会に奉仕する。修道士たちは独身であるが、共

団体において結婚は放棄されてはいない。修道士たちは彼らの修道会本部に絶対的に従うが、共同体では、人びとは全員が形成、修正、そして廃止に一致協力する法律にのみ従う。無為の修道士は役にも立たない祈禱の歌を響かせるが、これに対して平等の制度の下では、真の愛神 *caritas* の動行をすることによって神性にふさわしい礼拝をする。要するに、修道士たちは自分の活動すべてを厳しい規則に合致させることを強いられている。逆に共同体の人びとは、短い労働時間を除けば、自分たちの好みと意志に応じて自由に時間を使うのである。

個人的所有制度におけるよりも、共同体制度の下の方がさまざまな活動の自由が尊重されているかどうかについて決着をつけるためには、前者の制度の下では、必要から長時間の辛い労働を余儀なくされている大多數の住民が、法律によって自分の意志を自由に使うことを保証されているように見えるときにさえ、常に自分の意志を自由に用いることが多少ともできないでいることを考慮するだけで十分である。住民の五分の四が、それ以外の五分の一が快楽に浸りきり、怠惰の中で墮落することのために、一〇ないし一二時間も働くことを強いられている国よりも、万人が三ないし四時間働く国の方が、確實にこうした自由は多いであろう。

第六の反論。それによれば、共同の生活は社会を野蠻状態へと引き戻す、とされる。

反駁。学問と技芸（*Artes Liberales*）の欠如が、礼儀作法の粗野さおよび性格の荒々しさともども、一般に野蠻と呼ばれているものを構成している。ところが、以上のことはいずれも、バブーフおよびオーウェンが構想したような共同体のもたらす必然的な帰結ではない。その共同体は、社会の幸福と維持とに本当に貢献する学校教育および製造業 *industrie* を排除するのではなく、共同の利益や世論や余暇によってそれらを奨励するのである。学問と技芸（*Artes Liberales*）は、もはや貪欲および虚栄心をかき立てることは役立たないのであって、真実でなく、また万人にとって有益でもないものいっさいがそれら（*Artes Liberales*）から消え去るであろう。他方で、共同の教育と扶助および恩恵の絶え間ないやり取りとが、物腰を穏やかなものとし、また性格の激しさを和らげる、あの友愛（兄弟愛）を（人びとの）感情のうちに生じさせるであろう。個人的所有権が不可避的にもたらす結果である貧困と下劣さをなくすことによって、社会を戦場とし、まさに地獄とするごまかしと偽善が、社会から追放されるであろう。人びとは、飾るところなく礼儀をわきまえ、また粗暴さを伴うことなく誇りをもつであろう。われわれはそのときには、再び野蠻状態に陥るところか、共同体の確立によって、持続的な幸福と現実の完全な文明に到達する可能性を垣間見ることとなるであろう。

〔*1〕 ロバート・オーウェン Robert Owen (一七七一一年五月一日～一八五八年一月一七日) ウェールズ、モンゴメリー、ニュータウン。出身は、ブオナローティの言うスコットランドではない。イギリスの社会改革運動家、ユートピア社会主義者。紡績工場運営の経験から環境による性格形成原理を主張し、一八一三年からスコットランドのニューラナーク工場の経営に際して実践に努めた。農業を主とし、製造業も最良の機械を備えて行い、自給自足の共同体 co-operative community が数多くつくられ、ついには世界全体を包摂する、とする社会再編を構想した。二五年からアメリカ、インディアナ州にニュー・ハーモニー平等村を建設し、共同体計画の実験に着手。しかし英語版の訳者であるブロンテールが記す (*Bonarroti's History of Babeuf's Conspiracy for Equality*, translated by Brontetier, London, H. Hetherington, 1836, p. 213) 通り、ブオナローティが本書を著した一八二八年の時点でこの実験は失敗に帰しており、同年六月にオーウェンはイギリスに戻っていた。

〔*2〕 他方でオーウェンは一八一五年に工場法を提案し、二〇年に出版された『ラナーク州への報告』の中で失業問題等の根本的解決には社会秩序の転換が必要であると主張していた。この立場が労働者階級から支持されていた。一八二一～二二年にはロンドンの印刷工を中心として協同組合 co-operative society が組織されていた。イギリスに帰国したオーウェンは協同組合運動の指導者として迎えられ、三〇年代の協同組合運動の隆盛をみることとなった。

〔1〕 原語は education。その訳語については、第六章の訳注〔一〕を参照。

〔2〕 『学問・芸術論』第一部でルソーは、「人々は学問、芸術の光がわれわれの地平線上にのぼるにつれて、美德が逃れ去るのを見た。そして同じ現象があらゆる時代、あらゆる場所において観察されたのだ」と書いている(平岡昇訳『学問・芸術論』中央公論社『世界の名著』三〇所収、七〇ページ)。

〔3〕 『証拠書類 一三(続き)』(第一七三号所収)の「護民官グラッキュス・バブーフに宛てて送られ、公表された、先のブリュヴィオーズ三〇日付けの M. V なる署名のある書簡に対して」をも参照。

平等をめざす、いわゆるバブーフの陰謀(七)

